

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成11年(1999年)度

JICA LIBRARY



J 1159733(3)

国際協力事業団

90
16
PT
ARY

国内研

JR

99-31

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成11年(1999年)度

国際協力事業団



1159733(3)

中国及びモンゴル



① 中国 JICA 事務所における打合せ



② 中国中華全国青年連合会国際部訪問



③ 中国北京第二十二中学校訪問



④ 中国帰国青年との懇親会



⑤ パオのホームビジット



⑥ モンゴル対外貿易省表敬訪問



⑦ モンゴル建築設計管理局訪問



⑧ モンゴル国会議事堂

ヴェトナム



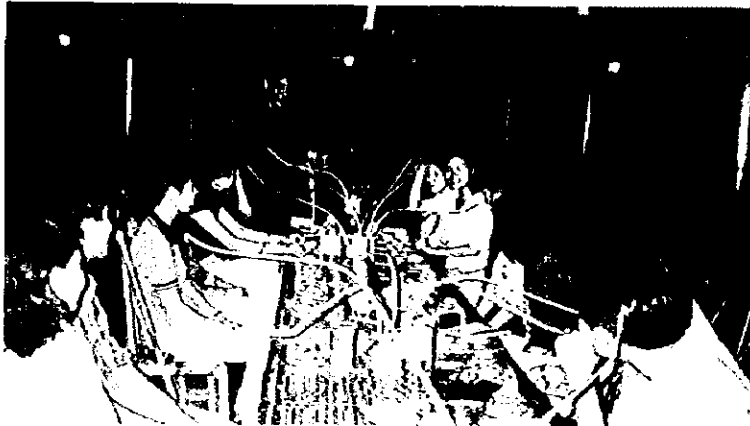
① JICA ヴェトナム事務所訪問
地曳所長と共に(10月3日)



② CYDECO 訪問(10月4日)



③ ハノイ市内小学校にて
(10月5日)



④ 青年との交流会にて
帰国青年と共に(10月5日)

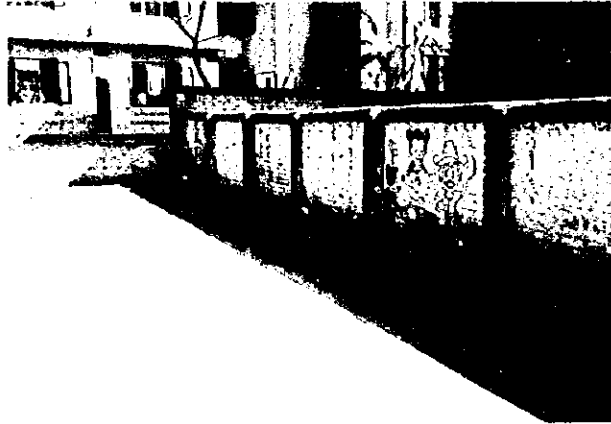


⑤ 交流会終了後青年と共に
(10月5日)

ネパール



① 自作の教材(ボールペンと紐)で振り子の説明をする Sabitri 先生



② 日本の学校に倣った古タイヤを利用した遊具



③ ネパールの伝統的な遊び“ネコとネズミ”



④ Suryodaya Secondary School の授業風景

目 次

I. 概要報告	1
II. 国別報告	5
1. 中国及びモンゴル	7
2. ヴィエトナム	31
3. ネパール	51

[国別報告構成]

I. 調査目的

1. 調査目的
2. 調査内容
3. 調査団員

II. 調査結果

1. 日程
2. 主要面談者
3. 調査結果概要
4. 現地調査・活動内容結果
(表敬・訪問先における意見交換や聴取内容／帰国青年活動状況／セミナー・交流会／ホームステイ／その他)
5. 所感及び提言

I. 概 要 報 告

I. 概要報告

1. 目的

青年招へい事業のアフターケアの一環として、本邦での招へいプログラムの実施に協力した受入関係者が、各招へい対象者を訪問し、参加青年に対するフォローアップと国民レベルでの相互理解の発展と永続的な友情を築くことを目的とする。

2. 派遣対象者

分野別都内プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等
「青年招へい事業」日本側関係者

3. 派遣国及びチーム編成

平成11年度は、中国・モンゴル、ヴィエトナム及びネパールに対し、合計3チーム(中国・モンゴルに対し1チーム、その他は1ヶ国につき1チーム。13名。)を派遣した。各チームはチームリーダー1人とチームメンバーにより編成されている。

4. 派遣日程

派遣国	実施協力団体	派遣期間
中国及び モンゴル	財団法人 世界青少年交流協会	平成11年9月2日～9月8日
ヴィエトナム	財団法人 ユースワーカー能力開発協会	平成11年10月3日～10月9日
ネパール	社団法人 駒ヶ根青年会議所	平成11年10月26日～10月31日

II. 国 別 報 告

中国・モンゴル

平成 11 年 9 月 2 日～9 月 8 日

財団法人 世界青少年交流協会

I. 調査目的

1. 調査目的

- ・「青年招へい事業」によって訪日した中国青年・モンゴル青年の帰国後の活動状況や、関連施設の視察、ホームビジット等を通して、両国における本事業の効果と今後のプログラムの要改善点について調査を行う。
- ・調査に際し、両国の関係機関との意見交換を行い、本事業に対する評価、要望の聴取、及び相互理解の促進を図る。
- ・中国及びモンゴルの文化、社会、経済事情等に関して見聞を広め、今後のプログラムの作成、改善に役立てる。

2. 調査内容

- (1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA) 中国事務所
 - ・中国の国情一般、JICA の活動状況及び「青年招へい事業」運営状況の聴取
- (2) 中華人民共和国文化部对外文化連絡局
 - ・表敬訪問及び日本と中国の文化交流に関する意見交換
 - ・同局の組織・活動内容の聴取
- (3) 中華全国青年連合会 (全青連)
 - ・表敬訪問及び同連合会の組織・活動内容の聴取
 - ・「青年招へい事業」に関する意見交換
- (4) 中国青年旅株式会社 (中青旅)
 - ・表敬訪問及び同社の組織・活動内容の聴取
 - ・「青年招へい事業」に関する意見交換
- (5) 北京市第二十二中学
 - ・中国の学校教育事情、教育現場視察
 - ・学生生活、学生観等について、学生と懇談
- (6) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA) モンゴル事務所
 - ・モンゴルの国情一般、日本とモンゴルの関わり及び JICA の活動状況

(7) モンゴル対外貿易省

- ・表敬及びモンゴルの経済・貿易に関する事情聴取
- ・同省についての説明
- ・帰国青年職場としての視察

(8) ホームビジット

- ・郊外におけるゲル生活の視察を行う。都市の人口増加に伴いその撤去も検討されているゲルの問題点等を把握し、より正確なモンゴル事情、及び異文化の理解を図る。

(9) 帰国青年活動現場視察

帰国青年がその職場・所属先において、どのように日本での体験を活かして活動しているか、またそれがどのような評価を受けているか実地調査を行う。併せて、職場の上司や同僚との意見交換を行う。

<訪問先>

- | | |
|------------|----------------|
| ・達因集団 | (中国・北京) |
| ・対外貿易省 | (モンゴル・ウランバートル) |
| ・建築設計管理局 | (モンゴル・ウランバートル) |
| ・国会議事堂 | (モンゴル・ウランバートル) |
| ・オノンチヨロット社 | (モンゴル・ウランバートル) |

3. 調査団員

	氏名	所属先	(青年招へい事業との関わり)
リーダー	菅野 正美	(財)世界青少年交流協会 事業部長	'84年より、都内プログラム、 合宿セミナー担当・総括
メンバー	野田 陽子	(財)世界青少年交流協会 プログラム・コーディネーター 合宿セミナー参加	'98中国(地域振興) '98スリランカ(教育・小中高教員) '99中南米混成(社会福祉) '99フィリピン(行政) '97中国(産業基盤整備) '99モンゴル(地方行政官)
メンバー	伊藤 秀光	岐阜県世界青年友の会 理事 分野別地方プログラム担当	'90韓国(学生) '91ブルネイ(教員・学生) '95中国(地域振興) '96、'97、'98インド(教育・理数科教員)
メンバー	藤井 靖子	世界青年徳山友の会 会計 分野別地方プログラム担当	'94太平洋混成(公務員) '95パキスタン(公務員・農業関係) '96中国(産業基盤整備) '97アフリカ(経済開発公務員) '98モンゴル(勤労青年)
メンバー	飯塚 貴子	東京都世界青年友の会 幹事長 合宿セミナー参加	'97インドネシア(農業) '98インド(教育・理数科教員) '99韓国学生(人文・社会系)

なお、(財)世界青少年交流協会鈴木弘喜副会長がオブザーバーとして、中国における調査チーム日程に参加した。

II. 調査結果

1. 日程

9月2日(木)

- 10:40 成田空港発(JL781 便)
- 13:00 北京首都空港着
- 14:30 ホテルチェックイン
- 15:20 中華人民共和国文化部対外文化連絡局訪問
- 16:30 JICA 中国事務所訪問・打合せ
- 18:00 JICA 事務所主催招宴(於「明苑」)
- 21:30 ホテル帰着

9月3日(金)

- 08:45 ホテル出発
- 09:00 中華全国青年連合会国際部訪問
- 10:00 中華全国青年連合会旅遊部訪問
- 11:30 中華全国青年連合会国際部招宴
- 13:30 北京第二十二中学校訪問
- 15:30 帰国青年職場訪問(達因集団)
- 18:30 帰国青年との懇親会(於「凱業飯店」・調査団主催)
- 22:00 ホテル帰着

9月4日(土)

- 午前 資料整理
- 11:45 ホテルチェックアウト
- 12:10 ホテル出発
- 15:00 北京首都空港発(OM224 便)
- 17:30 ウランバートルボヤント・オハー国際空港発着
- 18:30 ホテルチェックイン

9月5日(日)

- 09:50 ホテルにて集合、出発
- 10:00 帰国青年との再会
- 10:30 ウランバートル市内視察

12:00 昼食
13:00 ウランバートル市郊外(テレルジ)視察
17:30 ホームビジット
19:30 ホテル帰着

9月6日(月)

09:40 ホテル出発
10:00 JICA モンゴル事務所訪問・打合せ
11:30 市内カシミヤ工場、皮製品店等視察
13:30 昼食
15:00 対外貿易省ボルドバートル対外経済局長表敬訪問
16:00 市内国立百貨店、郵便局、マーケット等視察
19:40 ホテル帰着

9月7日(火)

09:40 ホテル出発
10:00 帰国青年職場訪問(建築設計管理局)
11:20 ボグドハーン博物館見学
12:50 昼食
15:00 帰国青年職場訪問(国会議事堂)
16:30 帰国青年職場訪問(オノンチョロット社)
18:30 ホテル集合
19:00 帰国青年との懇親会(於「ゲル・レストラン」・調査団主催)

9月8日(水)

08:20 ホテル出発
10:30 ウランバートルボヤント・オハー国際空港発(OM223 便)
12:30 北京首都空港着
14:50 北京首都空港発(JL782 便)
19:00 成田空港着
19:20 解散

2. 主要面談者

(1) 中華人民共和國文化部對外文化連絡局

李 剛	(Mr. Li Gang)	對外文化連絡局長
張 愛平	(Mr. Zhang Aiping)	對外文化連絡局長助理
陳 淨	(Mr. Chen Zheng)	對外文化連絡局通訳

(2) JICA 中華人民共和國事務所

新井 明男		副所長
川角 みのり		所長助理
周 妍	(Ms. Zhou Yan)	所員
阮 薇	(Ms. Ruan Wei)	所員
李 麗桃	(Ms. Li Taoli)	通訳

(3) 中華全國青年連合会国際部

劉 合華	(Mr. Liu Hehua)	副秘書長
倪 健	(Mr. Ni Jian)	国際部長
万 学軍	(Mr. Wan Xuejun)	国際部副部長
洪 桂梅	(Ms. Hong Guimei)	国際部通訳

(4) 中華全國青年連合会旅遊部(中青社)

陸 鉄鈞	(Mr. Lu Tiejun)	日本部副部長
劉 寧	(Mr. Liu Nei)	日本部外連担当

(5) 北京第二十二中學校

成 希春	(Mr. Cheng Xichun)	校長
教員	2名	
学生	3名	

(6) 達因集團

劉 秋庭	(Ms. Liu Qiuting)	公共事業部經理担当
趙 凱	(Mr. Zhao Kai)	担当

(7) 婦國青年(中国)

簡 軍	(Mr. Jian Jun)	(’95 年度經濟グループ)
-----	----------------	----------------

李 慶	(Mr. Li Qing)	(’96 年度経済グループ)
劉 輝	(Mr. Liu Hui)	(’98 年度経済グループ)
範 子文	(Mr. Fan Zhi Wen)	(’98 年度公務員グループ)
張 春權	(Mr. Zhang Chun Quan)	(’98 年度公務員グループ)
王 軍	(Ms. Wang Jun)	(’99 年度青年指導者グループ)

(8) JICA モンゴル事務所

江川 敬三	参事
山田 暁	職員
Ms. Bayansan TUGULDUR	所員
Ms. Selenge	通訳

(9) モンゴル対外貿易省

Mr. D.BOLDBAATAR	対外経済局長
Mr. TSEENJAV.L	専門官
Mr. Battai CHULUUNHUU	(’97 年度勤労青年グループ)
Ms. Yansan SELENGE	(’98 年度勤労青年グループ)

(10) モンゴル建築設計管理局

Mr. Balgansurengiin LKHAGVASUREN	建築設計管理局長
Mr. Luvsanbaldan BAYASGALAN	地震部長
Ms. Dorjpalam SARUUL	地震部職員 (’98 年勤労青年グループ)
塩月 恵理隊員	青年海外協力隊員 (Japan Overseas Cooperation Volunteer, JOCV)

(11) オノンチョロット社

Mr. Sh. BATDELGER	社長 (’94 年度公務員グループ)
-------------------	--------------------

(12) 帰国青年 (モンゴル)

Mr. Sh. BATDELGER	(’94 年度公務員グループ)
Ms. Janchivdorjyin CHIMGEE	(’94 年度公務員グループ)
Mr. Battai CHULUUNHUU	(’97 年度勤労青年グループ)
Mr. Zevsegiin ULZIYSAIKHAN	(’98 年度勤労青年グループ)
Ms. Vaanchig URANTSETSEG	(’98 年度勤労青年グループ)

Ms. Yansan SELENGE	(98 年度勤労青年グループ)
Ms. Itgel LONJID	(98 年度勤労青年グループ)
Ms. Dorjpalam SARUUL	(98 年度勤労青年グループ)

3. 調査結果概要

今回の私達の調査目的を達成するため、関係部署及び帰国青年との接触を積極的に持った。中国においては、関係部署を中心に打合せおよび意見交換を行った。一方モンゴルにおいては、帰国青年及びその職場を中心に彼等の訪日経験がどういう形で活かされ、また評価されているかについての実地調査を行った。

またホームビジット、市内視察、関係部署での談話等による中国・モンゴル事情及びニーズの把握をすることが出来、今後のプログラムの向上に役立つものとする。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ、中華人民共和国文化部对外文化連絡局

李剛文化部对外文化連絡局長を表敬訪問した。同局の組織・活動内容についてお話を伺い、さらに日本と中国の文化交流に関する意見の交換を行った。

李剛文化部对外文化連絡局長は日本の茶道等についても言及され、過日、裏千家のグループによる訪問も受けたそうである。これは単なる一例であるが、このように両国の文化を理解する上で青少年交流も重要であるとの見解から、中国の各種団体との活発な交流を望まれた。

ロ、JICA 中華人民共和国事務所

新井副所長、川角所長助理と中国での日程の確認を行い、中国の建国50周年(10月1日)に向けて急ピッチに市街整備が進められている旨説明を受けた。

また、JICAの「青年招へい事業」への協力について感謝の意と、地方分野別プログラムにおけるホームステイ人気の高さの説明を受けた。

我々も受入事業の経験を通じて、ホームステイの感動、地方での日本文化の紹介等、人と人とのふれあいによる草の根外交が、政府間の交流と同様に大切と説明し、特に、未来の国のリーダーとの交流は、とても意義深いものだとの意見が一致した。

ハ、中華全国青年連合会(全青連)国際部

JICA周職員同行のもと、全青連劉合華副秘書長を表敬訪問し、同連合会の組織及

び活動内容について説明を受けた。さらに万学軍国際部副部長も交え、「青年招へい事業」について、ひいては日中間の交流について懇談した。

① 全青連の国際交流活動について

中国の諸青年団体の連合体として、また中国政府の委託を受け、中国青年の対外交流活動の企画、実施を行っている。人種・民族、信仰、党派、職業と階層の違いを乗り越えて、世界各国の青年および青年組織との友好関係を発展させることに努めている。

世界の100を超える国の政府の青年関係の機構、政党の青年組織およびその他の民間青年団体との交流を行っている。

② 日中間交流について

「新日中友情計画」による日中間相互訪問は1987年に始まり、12年で3,000人にも及んでいる。各国との交流の中でも「新日中友情計画」の占める意義は大きく、成果をあげている。

訪日した青年のほとんどは初めての日本訪問であるが、滞在先での日程はホームステイを含め充実したものであり、青年も満足している。また日本に対して好印象を持って帰国しているとのことである。

訪日した青年は全国各地より募集されている。帰国後、学術の面で良い成績を残し、地位も高くなっており、全国各地で活躍している。

③ 交流の窓口

全青連の中で外国との交流を扱う機関としては、国際部と旅遊部がある。国際部では公式的な交流を主とし、旅遊部では外国からの青少年受入事業を主な業務としている。

「これからも両国のために交流を広げることが大事であり、末永く交流を続けていきたい。」という話であった。

二、中華全国青年連合会旅遊部(中青旅)

陸鉄鈞日本部副部長を表敬訪問し、同社の組織及び活動内容について説明を受けた。続いて「青年招へい事業」に関する意見交換も行ったが、陸副部長及び日本部外連担当の劉寧氏共、日本語が堪能であり、通訳を介さず懇談を行うことができた。

① 概要

中青旅は中国の三大旅行会社の1つである中国青年旅行社総社が発起人となって設立され、1997年に上海証券取引所に上場した会社である。中国共産主義青年団系

統では初めての上場会社である。

入国観光、国内観光、中国公民の自費海外観光、ハイテク製品の開発、観光資源の連動開発など、多岐にわたっている。中でも観光業務では国家旅遊局の認可により、本社は中国青年旅行社総社の旅遊経営許可を継承し、高いレベルの総合経営能力を備えている。

② 日中間交流について

100数カ国との業務関係の中でも、特に日本部の占める割合は大きく、スタッフ60名、契約社員40名体制で業務を行っている。これまでに約4万人の日本人旅行者を当部で取り扱った。うち5～6千人が高校生を中心とした団体であるが、修学旅行者であり、今までの所、青少年交流関連事業はそれほど多くを占めていないとのことであった。

ホ、北京市第二十二中学

成希春校長先生をはじめ、数日前に始まった新学期より高校1年生となった、男子生徒2人・女子生徒1人を交えて懇談した。団員の中で、今年度の中国教育グループを受入れ、合宿セミナーを担当する地方協力団体に所属する者がいたので、非常に参考になった。

① 学校の概要

1924年に建設され、今年で創立75周年を迎える古い学校である。かつては魯迅も本校で教鞭を取ったことがあるそうである。卒業生は約4万人にも及び、各界や諸外国にて活躍している。在校生は2千人近くおり、教職員は170人である。大学進学率は100%であり、大学に進学するか否かということより、どんな良い大学に進学するかということが問題となる。学業だけでなく、文化・スポーツ面においてもレベルが高く、バスケットボール、管弦楽団等の活躍もみられる。「中学」の名称であるが、日本でいえば、中学と高校が一緒になったような学校である。

② 日中間の交流について

高校生同士の交流が盛んで、7月末には日本の高校生のグループを3つに分けて受入れた。校長・副校長とも訪日の経験がある。また、当校の管弦楽団は読売交響楽団に指導を受けたことがある。

③ 高校生との懇談

3人とも大変しっかりしていて、勉強も良くしている。学校での授業を含め、毎

日10時間は勉強するそうである。余暇の過ごし方も、サッカー、バスケットボール、音楽鑑賞、インターネット等、多岐に亘る。但し、これらの趣味も、学校のクラブに入ってしまうと、専門性が非常に高くなってしまうため、学校とは別の場所(家や広場など)で友人達と楽しんでいるそうである。

将来就きたい職業も明確にイメージをもっており、我々の「行ってみたい外国は何か?」の質問にも、就きたい職業に関連した理由を上げて、それぞれ答えていた。

英語教育に関しては、外部の学校や身内に教えられて早目に勉強を始める学生もいるようだが、概ね小学2~3年生から正式に習い始めたようである。同年代の日本の学生と比べ、英語もよく話せるうえ、内容も、自分の考えていること、疑問に思うこと等を織り交ぜたもので、非常に感心させられた。

へ、JICA モンゴル事務所

所長不在のため、江川敬三参事と懇談した。江川参事がモンゴルに来て感じた事は、人間がとても優しい、ということだそうだ。それは遊牧という厳しい生活の中で、互いに助け合って生きているからではないかと思っている、とのことであった。

① モンゴルの事情

日本の4倍の面積を有するが、人口は260万人。うちウランバートル市内の人口は60万人とされているが、地方から来て住民登録をしていない周辺地域在住者も含めると実際には90万人ほどになると推定される。市長は100万人都市構想を掲げているようだが、産業がほとんどないのが現状である。就職率も悪く、大学卒でもレストランのウエイトレスをしていたりする。

② モンゴルと日本の関わり

諸外国に比べ日本からの援助が最も多く、無償援助が年間50億円、有償援助が年間50-60億円となっている。有償援助については、さらに30年の返還猶予付きという取決めになっている。また、インフラ整備——道路、橋、病院の建設、及び地方の7病院に医療機材の設置といった援助もされており、例えばウランバートルへの水の供給のために日本側で掘った井戸は、60余りにのぼる。なお、道路整備については、調査が終了した段階であり、今後の進捗が期待される。

日本大使館も、モンゴル観光に力を入れており、チャーター便を飛ばす等、観光の為の簡便な交通機関確保の努力もしているようである。

いずれにせよ、どのような開発援助も、モンゴルの環境を破壊することのない、モンゴルの価値観に合ったものでなければならないと考えている、との話を受け

た。

なお、近年、青年海外協力隊のモンゴル配置希望者が増えているそうである。他には、日本との音楽交流も盛んになってきているとのことであった。

③ JICA・モンゴル事務所の役割

金銭的な援助だけでなく人的な援助の必要性を感じているとのことであった。

江川参事との懇談の後、山田職員より日程の変更など簡単に説明を受けた。また、調査団側より、今年度本協会が受け入れる予定となっている、地方行政官グループについて少しでも情報が入れば、早目に知らせて頂きたいとの要望を山田職員に伝えた。

ト. モンゴル対外貿易省

JICA山田職員同行のもと、ボルドバートル対外経済局長を表敬訪問した。入り口でセレンゲ氏(98年度勤労青年グループ)が出迎えてくれた。

対外貿易省の主な役割は、モンゴルと外国との貿易関連事業の統轄である。1992年から民主主義に移行し、またこのところ日本からの無償援助・有償援助が多くなったこともあり、ここ3年～5年の間に、日本との協力関係・貿易関係共に深くなってきている(当日の午前中にも、日本からの援助を有効に使っているかどうかの評価会議があったらしい)。今年7月には、小渕首相もモンゴルを訪問されるなど、政治的にも両国の関係を深めたいとお考えなのではないか、というのがボルドバートル氏の認識であった。

「日本からの援助のお蔭で、モンゴルの青年達が日本へ勉強に行っており、交流も深まっている。このような青少年交流は今後の政治関係にも役立つので、モンゴル側も尚一層協力していきたいと考えている。」とのことをお話を伺った。(なお、同省はJICAとの関係が一番深い機関だそうである。)

(2) 帰国青年活動状況

イ. 達因集団(中国・北京)

1996年教育グループの一員として来日した張氏を訪問した。張氏は、1992年7月に達因集団を設立し、代表取締役役に就任した。我々にぜひ会いたいと多忙なスケジュールの調整を試みってくれたが、残念ながら会うことが出来なかった。達因集団は、薬、建築材、不動産、プロバイダー・サービス等幅広く事業を展開しており、年間売上高20億元以上、資産10億元以上の企業グループである。そのトップにいるのであるから、その多忙さは計り知れない。

代理で劉秋庭氏と趙凱氏が、会社概要・主要取扱製品等についての説明と会社内の案内をしてくれた。社内の雰囲気も非常によく、従業員の「創作意欲のあふれた働きやすい会社である。」という言葉そのものであった。

ロ、建築設計管理局(モンゴル・ウランバートル)

1998年勤労青年グループの一員として来日したサルール氏の職場を訪問し、サルール氏の上司であるラハグリスレン氏を混じえて懇談した。

建築設計管理局は国営機関であり、インフラ開発対策機関としての機能を果たしている。具体的には建築設計そのものの他に、都市計画法及び都市開発計画に従って、建築許可証の発行、建築確認申請の管理、建築材料の管理といったような業務を取り扱っている。また、建築材料については、1995年までロシア・中国から輸入されたものが主に使用されていたが、最近では海外の様々な国から輸入されるようになった為、こういった建築材料に関する使用法・使用時期等についてのセミナーも開催しているとのことであった。

建築設計管理局以外にも600余りの小さな公社があり、モンゴルの発展のために建築を増やしていきたい、これまでの内装工事だけでなく外装工事にも着手したい、との意向であった。しかし、実際にはインフラ開発省から、道路舗装の方に先にお金をかけたほうがいいのではないか、との意見も出されているようであった。

当局で、横浜市役所から現職参加し、昨年出来た都市建築法に基づき建築基準等をこれから作ってゆくという仕事に携わっている塩月恵理JOCV隊員にも会った。ラハグリスレン氏によれば、既に日本からは多額の無償・有償援助を得ているが、彼女のように、計画等細かいところまで助言をしてくれるような人的援助を、今後の日本に期待したいとのことであった。

一方、サルール氏は地震部に所属しており、氏の直属の上司であるバヤスガラン氏を交えての話によれば、モンゴルには地震の起こる可能性をはらんだ地点が国土全体に亘って無数にあり、今後耐震建築等にも目を向けていかなければならないということであった。サルール氏は、訪日時、都内分野別プログラムで日本の耐震高層建築の視察及び説明を受けており、これが役に立っているとのことであった。

ハ、国会議事堂(モンゴル・ウランバートル)

1994年公務員グループの一員として来日したチムゲー氏及び1998年勤労青年グループの一員として来日したウルゼイサイハーン氏の職場を訪問し、ウルゼイサイハーン氏の上司であるエネビシュ氏を交えて懇談した。

1990年からの市場経済導入、1992年からの民主主義への移行、及び同年の憲法制

定(帰国青年のウルゼイサイハーン氏は、これに携わった)を経て、現在同国会は、国会議員76名(平均年齢35～38歳)、公務員(国会議員のアシスタント等。帰国青年のチムゲー氏は、これに当たる仕事をしている)150名を擁しているとのことであった。なお、国会議員76名のうち女性議員は7名だそうである。

エネビシユ氏は、帰国青年から日本での交流につき詳細な報告を受けているらしく、私たち調査団との面談に当たり、まるで自分のことのように喜んで迎えてくれた。また、時間の許す限り自ら国会内を案内してくれた。このことから、二人の帰国青年が、その職場において日本での研修・交流の成果を評価されていること、実際に親日家を増やす役割も果たしていることが感じられた。

二、オノンチョロツ社(モンゴル・ウランバートル)

1994年公務員グループの一員として来日したバッデルゲル氏の職場を訪問した。元々は予定には入っていなかったのであるが、テレルジ視察同行時、「是非自分の会社を視察して帰ってほしい。」という氏のたつての願いで、実現した訪問である。

バッデルゲル氏は訪日後、国会での公務員職を辞職し、市場経済の波にいち早く乗って会社を設立したのである。訪日時に得た人脈を活かして日本とのビジネスを始め、その後も数回来日しているらしい。企業家としての成功を享受しているかに見えたが、実は、ある程度資金ができたなら、氏は議員として政治の世界に戻り、再び国会で働くことを目標としているのであった。詳しく話を聴取するにつけ、「青年招へい事業」は、非常にさまざまに形を変えて成果を上げているのだと感じた。

(3) セミナー・交流会

イ、JICA中国事務所主催招宴

明苑にて、JICA中国事務所新井副所長、川角所長助理ほか、周所員、阮所員と調査団で北京料理を囲みながら、中国の事情について、「青年招へい事業」について、また受入側としての実状など、さらに打ち解けた意見交換をすることができた。

なお、周所員は1998年度に本事業にて訪日した帰国青年であり、彼女からも、日本語及び日本に関する知識を活かした帰国後の活躍ぶりについて話を聞くことができた。また、阮所員も日本語が堪能で、「青年招へい事業」に大変興味を持っており、是非参加して来日を果たしたいと考えているようであった。

ロ、全青連国際部招宴昼食会

聚雅飯店にて倪健全青連国際部部長を囲んで、湖南省の家庭料理を味わうことが出来た。何度も訪日している倪部長は、とても流暢な日本語で料理の説明もして下さっ

た。全青連での活動や日中間の交流など、様々な事柄を話しながら和やかな宴となった。

美味しい料理に満足している我々に、「料理はその国、その土地の文化を知ることが出来る。」と教えて下さった。また、互いに「率直な交流」をしていくことを確認し合った。

ハ、帰国青年との懇親会(中国)

凱業飯店での調査団主催の懇親会に6名の帰国青年が姿を見せた。全青連国際部で通訳してくれた洪氏も1999年公務員グループの一員として、またJICA事務所からも川角所長助理、周所員、阮所員も出席した。2テーブルに分かれ、和やかな雰囲気の中で宴は進んだ。

帰国青年を代表して、張春權氏が訪日時のお礼と現在の青年の活躍ぶりなどを話してくださり、最後に我々の旅の前途を祝して下さい。それに対し日本側より、これからの日中間の交流の重要性について、そしてますますの深い交流活動が行われることを願っていると伝えた。

ニ、帰国青年との懇親会(モンゴル)

ウランバートル市内のゲルレストランにおいて、調査団主催の夕食会を開き、帰国青年達と懇親・再交流の場を持った。

広いゲル内で、出席者が三つのテーブルに分散してしまった為、全員の話が聞けなかったのは残念であったが、それぞれ懐かしい日本での失敗話、不思議に思ったこと、ホストファミリーの自慢話等に花を咲かせていたようである。参加年度の違う帰国青年達が、訪日という共通項でもって結ばれ、楽しい思い出話を共有している姿は、「青年招へい事業」の成果が根付き始めていることを感じさせた。

参加年度が同じで、都市部に住んでいる帰国青年達は、よく集まっているようであった。しかし、帰国青年達の優秀さを表わすように、日本から帰国後すぐにまた外国へ留学を命じられ、不在の青年も多かった。

このように前途有望な青年達を、今後も迎え入れ、交流して行きたいと強く感じた。

(4) ホームビジット

郊外における実際のゲル生活を見学した。遠方から来た客ということで、家人は私達を心から歓迎してくれ、自家製のヨーグルトやお菓子等で、もてなしてくれた。ゲル生活に必要な燃料の一つとして、石炭が使用されている。これが「公害のもと」とされ、ウ

ランバートル市の人口拡大に伴い、その撤去も検討されているということであった。

子供達は馬を自由自在に乗りこなし、家の手伝いもよくしていた。学校はかなり離れたところにあるが、歩いて通うらしい。

また、移動の多い遊牧生活の中にあっても、ゲル内にはラマ教の小さな祭壇が設けられており、彼らの信仰心を感じさせた。

(5) その他

イ、ウランバートル市及び郊外視察

ホテル玄関に、1994年、1998年の招へい青年5名と通訳のセレンゲ氏、1997年及び1998年のJICEコーディネーターであった加藤氏(別の仕事で来蒙、休日の為参加)、トゥギー JICA 所員そして我々5名の計13名で三台のワゴンに分乗して、市内観光、近郊(テレルジ観光地)へ視察に出発した。

スフバートル広場で国会議事堂等の建物を一望し、ラマ教寺院、ザイサン丘見学後、郊外へと向かった。ウランバートル市内より約1時間、大草原に点在するゲル、ヤギ、ヤク、羊、牛等を目にし、モンゴルに来た実感を味わった。

テレルジの亀に似た大岩の前で乗馬体験を、ツーリスト・キャンプ内のレストランで初めてのゲル内部を体験した。その後、ホームビジットとして訪れた、遊牧民のゲルでは手製の菓子、ヨーグルトによる歓待を受けた。

5. 所感および提言

(1) 調査団所感

一週間の日程で二カ国を訪問して調査を実施した。

中国滞在はかなりハードな日程だったが、多くの人に会うことができ、有効な意見交換ができた。

モンゴルでは比較的ゆったりとした日程であり、帰国青年との交流や職場訪問による調査も十分に行うことができた。これまであまりなじみのなかったモンゴルではあったが、JICA モンゴル事務所の江川参事からモンゴルにおける現状について話を伺うことができ、帰国青年との交流や職場訪問での説明を理解する上で役立った。

帰国青年が温かく迎えてくれたことにより、快適に過ごすことができたし、彼らの活躍ぶりにも触れることができたことは調査団としてこのうえない喜びである。彼らの今後の更なる活躍に期待感が持てる調査であった。

(2) 団員所感

イ、菅野正美「大きな成果をあげる青年招へい事業」

この青年招へい事業においては、これまで、実施協力団体の立場で開講式や都内プログラム、合宿セミナー、閉講式など、公式な場で来日した青年に接することが多かった。

今回、アフターケア調査団参加の機会を得て、帰国青年の帰国後の仕事ぶりに接するとともに、のびのびとした日常の顔に触れることができた。

中国での滞在は短く、帰国青年の仕事ぶりに直接触れることは少なかったが、今回の訪問でお世話していただいたJICA中国事務所の周さんや全青連国際部の洪さんもこの事業参加者であり、活躍ぶりの一端を垣間見ることができた。来日時さまざまな経験を、現在の仕事に十分に活かしているように感じられた。

モンゴルでは帰国青年たちの心温まる歓迎を受け、団員一同大変感激した。心のこもった接待によって、モンゴルの滞在を十分に楽しむことができたし、モンゴルの現状を理解する上で大いに有効だったといえる。

その結果、これまで以上にモンゴルに対する親近感が増したことは言うまでもない。これまでの帰国青年のうち、半数近くが海外へ留学しているとのことだったが、この一件を見ても彼らの将来における活躍が期待できると感じた。

ウランバートルでは5人の帰国青年の職場を訪問することができた。それぞれ、国の法律制定にかかわる仕事をしている人や、国会、建築設計管理局、対外貿易局で仕事をしている人など、将来の国造りを担う公務員が多かったが、中には市場経済への移行に伴って、継続的に日本とのつながりを持ちながら企業家として活躍している青年もいた。いずれにしても、彼らが今後のモンゴルを支えていく人材であることは間違いないと思われる。

そして、何よりも日本に対する好意を強く持っているということは、この事業の成果として大変重要なことではないかと考える。

この国にはインフラの整備や就業率のアップ、市場経済への移行に伴う法整備など、まだまだ解決していかなければならない深刻な問題が多いようであるが、こうした状況にこれらの帰国青年が関わりを持っていくことは間違いない。

こうした意味において、今後、さまざまな分野を通じて日本との関係はより一層強くなっていくものと考えられる。日本からのさまざまな援助は有効に活用されつつあり、青年招へい事業における大きな成果とともに、モンゴル側から高い評価を受けていることは日本人として、また、青年招へい事業実施協力団体としてこのうえない喜びである。

ロ、野田陽子「帰国青年と再会して」

私はプログラム・コーディネーターとして「青年招へい事業」に関わって来たが、モンゴルという国に興味があり、1998年度モンゴル勤労青年グループ訪日時には、青年として合宿セミナーに参加した。そのため、帰国青年達の仕事及び所属先についての知識はあったが、実際にどんな所で働いているのか、どのような社会の中で、どのように彼らが位置づけられているのか、この目で見てみたかったのである。

モンゴルに着くと、私たちの宿泊場所であるフラワーホテルは、日本との合弁で設立されたせいもあってか、ほぼ全館の宿泊者が日本人であった。こんなにたくさんの日本人がモンゴルを訪れているのか、と正直な所、驚いた。モンゴルにある大学の中には、日本語科も多くあるらしく、実際、滞在中に訪れたレストランなどでも、「日本語勉強中」という学生アルバイトによく出会った。また帰国後は、モンゴル観光の本が日本で数多く出版されていることを知り、両国間は予想した以上に近くなっていた。

さて、帰国青年達は胸を張って自分達の職場を案内してくれ、その上司の方の話からは、帰国青年達に対する評価の高さを感じ取ることができた。民主化後間もないモンゴルの中で、私とほとんど年齢の変わらない青年達が、国の発展のために重要な役割を果たしているのだと肌で感じた。

今回の訪蒙に当たり各方面に連絡を取ってみると、調査団がウランバートル(以下UB)を訪れる頃、1997、1998年度のJICEコーディネーターであった加藤紀子氏もUB滞在中であること、合宿セミナー時通訳を務めた留学生ダムディンバヤル氏もUB滞在中であることがわかった。

帰国青年達もよく集まっては、食事会などをしているようであったが、今回は特別にこの二人も交えて、さらに楽しい交流の場を持つことができた。合宿セミナー後など、日本人青年側にも同窓会のようなものができることがある。これは同じ分野で働く者達の横の繋がりができるということであり、青年招へい事業のもたらすもう一つの素晴らしい成果であると、私は考えている。今回のように、国境を跨ぎ、青年・通訳・コーディネーターの枠も跨いで、同窓会的交流ができたことも本事業の成果といえるだろう。なお、加藤氏、ダムディン氏には要所要所で通訳として助けて頂き、心から感謝している。

前後したが、中国においては全青連を通して訪日した帰国青年との再交流・意見聴取が主であった。そこで、外交部を通して訪日し、私がプログラム・コーディネーターを務めた、1998年度地域振興グループの青年二名と連絡を取り、資料整理の時間を利用して会うことにした。

一人は人民大会堂で勤務している湯潤氏(男性)、もう一人は外交部に勤務している

鮮韋夷氏(女性)である。湯氏は、国内出張で各地を飛び回り、忙しくしているようであり、鮮氏はアメリカへの転勤を打診されているが、御主人を中国に残していくことはできないと悩んでいる様子であった。本件をみても、彼らにとって訪日は一つの出世の条件だったのではないかと思えてくるほど、目覚しい活躍ぶりである。

また、懐かしい話の中に、北京在住の者同士や、地方在住の者が北京を訪れる際など、よく集まっては食事会を開いたりして、帰国青年同士の交流を絶やさずにいることが窺い知れた。

彼らによれば、「青年招へい事業」の要改善点とは、「滞在期間が短い。」ことだそうである。それにしても当時は、1ヶ月近くも職場を空けることで大変な思いをしたはずである。「今思い返せば、もっと日本にいたかった、もっとたくさんの物を見、人と会って交流したかった。」ということなのだろう、と私は受取った。

以上今回の両国の視察・帰国青年からの意見聴取事項を踏まえ、今後のプログラム・コーディネーターとしての仕事に活かして行きたいと考えている。

ハ、伊藤秀光「中国・モンゴル事情を目の当たりにして」

私は、今年8月にJICAの「青年招へい事業」で、アセアン混成公務員グループ中のフィリピンの青年を受け入れ、その上、今回初めて同様の「青年招へい事業」のアフターケア調査チームに参加させていただき、不思議なご縁を感じる。参加するにあたっては、調査団の一員としての責任と不安、初めて訪れるモンゴルへの期待とが入り組んだ複雑な気持ちであった。

さて全日程の三日間は、北京にて次年度の大学生交流事業推進のため関係官庁への表敬訪問、どの官庁でも熱烈な歓迎を受け、これまでの友好の深さに感激した。また、帰国青年との交流会を通じ帰国後彼らが中国でさらに活躍されているお話を伺い感動した。中国では、ちょうど10月1日の建国50周年に向けての急ピッチな建設ラッシュ、道路の美化、整備の進む街並み、自動車、自転車、そして人口12億人とも言われる人、人、人、活力あふれる中国は、2年前に訪れた時より一段と近代化が進んでいることに驚かされた。

そんな中国を後に、大草原を眼下に見ながらモンゴルの首都ウランバートル空港に到着、初めてのモンゴルは、前日から降りつづけた集中豪雨で、市内の道路のあちこちに水たまりができたり、ホテルではトイレの水が出なかったり、シャワーの湯が出なかったりと、大変なスタートとなった。

翌日は、1994年と1998年の帰国青年の案内で、市内視察及び郊外的生活視察のため、大草原へ出かけホーム・ビジットをし、この国の雄大さとゲルでの遊牧民族との語らいに感動した。

そして、帰国青年が将来のモンゴルをリードするような、素晴らしい人材であり、活躍されていることに感激した。

JICAのモンゴル事業所の説明では、モンゴルは、ソ連経済圏のコメコングループの一員であった時代と違って、1991年のソ連邦の崩壊後市場経済を導入したばかりで、国づくりはこれからとのことであった。その支援国として日本への期待も大きく、実際日本からの支援が一番多いとのことであった。2年間かけての道路網の調査、観光開発の調査等、モンゴルへの具体的な計画を聞いた。しかし、観光開発は進め方をひとつ間違えると、あの素晴らしい大草原のゲルの生活が無くなるのではと危惧を抱くのは私ばかりではないと思う。モンゴルの歴史、自然、文化を大切に残しつつ、一步一步慌てずに進められることを願うばかりである。

それにしてもモンゴルと言えば、鎌倉時代の元寇、源義経が逃げ延びて、チンギスハンになったという伝説等、歴史的にも関係が深い。また、私自身がモンゴル人と間違えられたように、日本人とモンゴル人はよく似ており、とても親近感を覚えて帰ってきた。ぜひ更なる「青年招へい事業」等を通じて草の根外交により着実に友好が深まって行くことを祈りたいと思う。

また機会があったらモンゴルに行き、更に友好を深めたいと思う。もちろん受け入れ事業にも積極的に参加したい。

二、藤井靖子「中国とモンゴルを訪問した後で思うこと」

1度に中国とモンゴルの2カ国訪問ということで、アフターケア調査団の一員というだけでもその責任の重さに不安を感じているのに、いっそうの不安を抱えての出発となった。

しかし、北京空港に降り立ち、通訳の李氏の笑顔とドライバーの真摯な出迎えに不安は一気に吹き飛んだ。

中国のスケジュールはハードなものであったが、とても友好的な対応に感激するばかりであった。また、流暢な日本語での懇談は驚きと共に、彼らの日本に対する思いの深さを知るものとなった。

滞在期間約2日という短さに中国への思いを残しながらのモンゴルへの移動となったが、ほんの2時間ちょっとの飛行時間で目にした風景は、感動以外の何ものでもなかった。また、JICA山田職員とトゥギー所員の出迎えにモンゴルでの不安は吹き飛んだ。そして、帰国青年との再会。懐かしい顔・顔・顔である。まさかモンゴルの地で再会できるなんて。そして生き生きと活躍する青年たちの職場を訪問出来たことはとても意義深いものであった。

今回の訪問で気づいたことは、やはり人の温かさ、優しさである。訪問先の温かい

受け入れ、JICA職員の熱心に対応して下さる姿。帰国青年の温かい出迎え。そして何よりも通訳の方の人柄・熱心さである。私のように語学の不勉強な者にとっては重要な心の支えにもなるのである。この事に気づいた時に、訪日する青年達の不安や必要とするものが何であるか、少し分かった気がする。

訪日する青年達の不安を少しでも軽くしてあげるためにも、心のこもった対応に努めていきたいと思う。

そして、青年達の日本に対する思いに負けないように、青年達の国に対する思いを持ちたいと思うようになった。

ホ. 飯塚貴子「アフターケア調査に参加して」

今回、この「青年招へい事業」アフターケア調査団の一員としてプログラムに参加できたことを大変うれしく思う。私は「青年招へい事業」の中では都内分野別プログラムの合宿セミナーに参加したことがある。しかし帰国青年が帰国後、各分野でどのような活躍をしているのか、ということは実際には知る機会があまりない。したがって、この調査団の派遣はとても興味深いものであり、楽しみだった。

調査団のスケジュールは、体に多少の無理を感じることもあったが、内容は充実していて良かった。以前交流したことのある団員たちも、再交流という目的を達成できていたように思う。特にモンゴルにおいては、彼らの人懐っこい性格に助けられ、私としても初めて会う青年達と楽しい時間を過ごすことができた。

中国・モンゴルともに帰国青年はそれぞれの分野ですばらしい活躍を披露してくれた。彼らの頑張りをを見ると、私達の日本での努力(セミナー運営について、何ヶ月も前から多大な時間を割き、頭を使っているという事実)が決して無駄にはなっていないのだという認識へとつながり、ただ単純にうれしかった。

それと同時に、私達が担う任務がとても大きく責任のあることだということを改めて実感した。

今回得た経験と実感は、今後のセミナー運営にも大いに生かしていけると思う。また、「青年招へい事業」に関わる者として、プログラムの運営を考えるだけでなく周囲の人達に「私が見たこと・感じたこと」を話し、より多くの人に興味を持ってもらうという任務があることを強く感じた。大変意義深い経験だった。このような機会を与えてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

(3) 提言

モンゴルにおける市場経済は、まだスタートしたばかりであり、課題が多いように感じられた。主たる産業も少なく、デパートや市場での商品も輸入品が圧倒的に多い。

今後、雇用を生む産業の育成が望まれるが、市場経済への移行に伴うさまざまな面での法整備や環境保護の立場からの規制も必要になると考えられ、こうした分野の専門家による人的援助が強く望まれる。

ただ、こうした援助を実現するためには長期的な展望に立ち、援助の効果をより一層増していくために、こうした専門家に対する語学研修も早急に開始すべきではないかと考える。これは「青年招へい事業」には直接関係ないかもしれないが、JOCV活動面で考慮していただければ幸いである。

モンゴルでは、現在、日本語学習が盛んであると言われている。これは、日本からの様々な援助により、観光客をも含めた我が国との接点が増えてきたことと関わりがあるのではないかと考えられる。

こうした状況下において、前述のような人的援助をより効果的に進めるためにも、専門家の語学研修と同時に、日本語を理解する青年の育成が緊要であろう。

今後の招へい青年の分野には、教員だけでなく、語学教育や語学修得に携わっている青年も加えていく必要があるのではないかとと思われる。

ヴェトナム

平成11年10月3日～10月9日

財団法人 ユースワーカー能力開発協会

I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ 帰国青年との再交流を通し、両国青年の相互理解を深める。
- ・ ヴィエトナム側と日本におけるプログラムに関する意見交換や相手国事情について把握し、今後のプログラムの改善に寄与する。
- ・ 日本への関心を喚起するとともに、相互交流を永続的なものにする。
- ・ 青年の所属先関係者を訪れ、帰国青年が日本で得た成果を確認し、この事業の促進や支援を働きかける。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA) ヴィエトナム事務所訪問

- ・ ヴィエトナムの国情、JICA の活動状況および青年招へい事業運営状況概要

(2) ヴィエトナム国際青年協力開発センター (International Youth Cooperation Development Center, CYDECO) 訪問

- ・ 組織活動状況、青年招へい事業に関する意見交換、要望事項聞き取り

(3) 帰国青年活動現状等視察

- ・ 帰国青年が、職場や地域において日本での研修、および体験で得た「知識」や「成果」をどのように活かし活動しているか、実地調査を行う。
- ・ 授業参観

【訪問先】 ハノイ音楽院

Thinh Quang 小学校

(4) 帰国青年との意見交換会

- ・ 帰国青年と日本側との再交流

(5) ハノイ工科大学日本語センター訪問

- ・ 学生との意見交換
- ・ 授業参観

(6) JICA 事業(ハノイ貿易大学青年海外協力隊語学教師現場) 視察

- ・組織活動状況、事業に関する意見交換
- ・授業参観

3. 調査団員

	氏 名	所 属 先	青年招へい事業との関わり
リーダー	加賀美 山希	財団法人ユースワーカー能力開発協会 国際事業部	分野別都内プログラム担当
メンバー	徳原 恵利	宮崎県国富町農業委員会	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	松本 想	アメリカンファミリー生命保険会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加
メンバー	小倉 正恒	東電ソフトウェア株式会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加

II. 調査結果

1. 日程

平成 11 年

10 月 3 日(日)

10:00 成田空港発(NH909) 「徳原団員」 10:55 福岡空港発(JL753)
 13:35 香港国際空港着 13:10 香港空港着…合流
 14:55 香港国際空港発(CX791)
 15:45 ハノイ・ノイバイ空港着
 17:30 ホテル着
 19:00 夕食

10 月 4 日(月)

09:30 ホテル出発
 10:00 国際協力事業団(Japan International Cooperation Agency, JICA) ヴィエトナム
 事務所訪問
 12:00 昼食
 14:00 CYDECO 訪問
 16:30 ホテル着

18:00 夕食

10月5日(火)

09:30 ホテル出発

10:00 帰国青年活動現場訪問(Thinh Quang Primary School)

12:30 昼食

14:00 ホテル着

16:00 帰国青年との意見交換会

18:00 交流会

20:30 ホテル着

10月6日(水)

自主研修

10月7日(木)

09:00 ホテル発

10:00 ハノイ貿易大学日本語学科見学

12:00 昼食

14:00 ハノイ工科大学日本語センター訪問

16:30 ホテル着

18:30 夕食

20:30 ホテル着

10月8日(金)

09:30 ホテル発

10:00 JICA 事業視察(ハノイ貿易大学日本語学科見学)

12:00 昼食

13:30 JICA 事務所報告

16:00 ホテル着

18:00 JICA ヴィエトナム事務所の方と夕食会

20:00 ホテル着

10月9日(土)

07:00 ホテルチェックアウト

07:30	空港へ移動	
08:20	ハノイ・ノイバイ空港到着	
09:50	ハノイ・ノイバイ空港発 (CX790)	
12:45	香港空港着	
14:45	香港空港発 (JL732)	「徳原団員」 14:25 香港空港発 (JL758)
19:45	成田空港着	19:55 福岡空港着

2. 主要面談者

(1) JICA 現地事務所

地曳 隆紀	所長
畠山 敬	次長

(2) ヴィエトナム国婦国青年連絡組織 (CYDECO)

Mr. Tran Duc Loi	Director General of the International Youth Cooperation Development Center (CYDECO-VIETNAM)
------------------	--

(3) 帰国青年活動現場

イ. Thanh Quang Primary School

Ms. Nguyen Thu Mai	校長
Ms. Nguyen Thi Xuan Dung	副校長
Ms. Ngo Phi Khanh	95 年度帰国青年 (教育グループ)

ロ. ハノイ音楽院

Ms. Nguyen Thi Thu Thuy	98 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Le Huong Thu	98 年度帰国青年 (教育グループ)

(4) 帰国青年との意見交換会

Mr. Nguyen Nam Son	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Ngo Phi Khanh	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Mr. Tran Le Tra	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Xuan Quang	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thi Hoang Van	96 年度帰国青年 (公務員グループ)
Mr. Nguyen Hong Quang	96 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thu Huong	97 年度帰国青年 (公務員グループ)

Ms. Tran Huong Thao	97 年度帰国青年 (経済グループ)
Ms. Dung Thi Thu Ha	97 年度帰国青年 (公務員グループ)
Mr. Nguyen Hoai Linh	97 年度帰国青年 (公務員グループ)
Ms. Nguyen Quynh Hoa	97 年度帰国青年 (教育グループ)
Mr. Pham Dai Duong	98 年度帰国青年 (経済グループ)
Mr. Pham Tat Thang	98 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thi Thu Thuy	98 年度帰国青年 (教育グループ)

(5) 交流会

Mr. Tran Dac Loi	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Mr. Nguyen Nam Son	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Ngo Phi Khanh	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Mr. Tran Le Tra	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Xuan Quang	95 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thi Hoang Van	96 年度帰国青年 (公務員グループ)
Mr. Nguyen Hong Quang	96 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thu Huong	97 年度帰国青年 (公務員グループ)
Ms. Tran Huong Thao	97 年度帰国青年 (経済グループ)
Ms. Dung Thi Thu Ha	97 年度帰国青年 (教育グループ)
Mr. Nguyen Hoai Linh	97 年度帰国青年 (公務員グループ)
Mr. Pham Dai Duong	98 年度帰国青年 (経済グループ)
Mr. Nguyen Van Hai	98 年度帰国青年 (経済グループ)
Ms. Pham Thi Hoa	98 年度帰国青年 (経済グループ)
Mr. Pham Tat Thang	98 年度帰国青年 (教育グループ)
Ms. Nguyen Thi Thu Thuy	98 年度帰国青年 (教育グループ)

(6) Foreign Trade University

猪俣 礼子	日本語教師
Mr. Tran Viet Dzong	Lecturer, Head of Department of Academic Research and International Relations

(7) Hanoi University of Technology, Japanese Language Center

大西 和彦	日本語センター主任
Ms. Nguyen Thi Thanh Nhan	日本語センター教師

3. 調査結果概要

- ・ ハノイ在住の帰国青年との意見交換により日本への知識、理解が深まるなど日本での研修の成果を確認できた。
- ・ 短時間ではあるが帰国青年の職場を訪問出来、今後のプログラム作成上の参考となった。
- ・ 今回の調査では、首都ハノイのみの訪問であった為ヴィエトナム全地域から来日する青年の帰国後の動向を把握するのは困難であったが、貴重な意見を聞く事が出来た。今後は、ハノイのみならず地方の青年の動向についても確認を行うべきである。
- ・ 来日青年は、ヴィエトナム全土から来日している為、地域問題、出身母体により同じ研修でも来日目的には若干の違いがあるようであった。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) JICA ヴィエトナム事務所訪問

JICA ヴィエトナム事務所は、現在のヴィエトナムに於いて下記の5つの柱を中心とした事業を行っている。

- ・ 人的資源開発と Institutional Building
- ・ 経済インフラ整備(電力・交通)
- ・ 農業インフラ整備及び農業技術の向上
- ・ 教育・保健衛生
- ・ 環境保全

今、JICAが主体となって行っている青年招へい事業では、上記の少なくとも①～④の目的を果たすべく、ヴィエトナム青年を日本に派遣し、研修を行っている。ヴィエトナム国の未来を担う青年達に、日本に対する理解を深めてもらい、自国の発展に役立ててもらいたい。青年の選出基準は後に述べる「CYDECO」を参照願いたい。JICA事務所としては、まず基礎インフラを整備し(その為にはもっと日本を含め、外国企業の協力が必要だが)、これからを担う青年が育つ事を願っている。ヴィエトナム青年達にとっては、この機会に派遣される事は、大変名誉な事である。それだけに目的意識の高い者が多い。逆に受け入れる日本側が、彼らの目的に適うだけの青年を集められるかと言うと、必ずしもそうではない。意識のズレはどうしても否めない。だからこそ、「ヴィエトナム青年を育てる。」だけではなく、「(ヴィエトナム青年が)日本青年を刺激してきて欲しい。」との希望も持って青年招へい事業を行っているのだ……とは、地曳所長の弁である。

(2) ヴィエトナム国際青年協力開発センター (International Youth Cooperation Development Center, CYDECO) 訪問

このセンターは国家組織であるヴィエトナム国家青年団体委員会の管轄組織の中で海外協力を担当する、青年招へい事業の主な受入窓口である。招へい青年の選考過程等について伺った。青年招へい事業へ加わってまだ5年目ということもあり参加者の人数はまだ少なく、選別については大変厳しいということである。年間100名の招へい青年枠で、CYDECO側としてはヴィエトナム全土61県へ推薦依頼を出し、代表を各1名選出し、他に23省庁から各1名を選出し、JICAへ提出する。その他日本大使館枠が20%ある。選別方法として他にも要求はあるが英語は必要不可欠として考えているようだ。青年招へい事業に対してプログラムはそれなりに効果的であり、個人の意見ではなく国民も高く評価しているということであった。ヴィエトナムは経済改革を始めたばかりであり、日本でいろいろ学んできて欲しいということであった。また日本を訪れたことによりヴィエトナムで近代的社会を想像することが出来たそうだ。

1ヶ月の研修で詳しい技術を学ぶことは困難なので、一般的な社会知識や構造を見てきて欲しいということである。また日本で青年と交流する機会を増やし、文化活動を与えて欲しい、またヴィエトナムで行政改革を行なう上でも、日本のシステムを来日青年に紹介して欲しいということであった。招へい青年の分野にふさわしい人選についてはなるべく努力はするが、ヴィエトナム全土から選ばれるためなかなか難しい。また、招へい青年は1つの分野だけでなく幅広い分野に興味があるということである。選別については各団体の意見も聞き判断したいということであった。CYDECO側の募集の開始時期については外務省から招へい状を受取り1週間以内に各団体へ連絡する。その後各団体より1ヶ月以内にリストを出し、1週間で検討し、その後JICAがリストを検討し、CYDECOへ返答後、各団体へ決定書を送るという流れである。来日前のオリエンテーションでは、始めの4日間はCYDECOが説明をし、残りの2日間はJICAが行なうということだ。

招へい青年は皆大変満足しており、今後もこの活動の継続を希望している、ということであった。また派遣団側として参加者のプロフィールを早く受取れば参加者にあったプログラムを実施できる事を伝え、今後お互いに協力していく事を約束した。

(3) Thanh Quang Primary School

ドイモイ(刷新)政策とは、集団的統制経済を市場経済化し、国際経済に積極的に参加することである。このことは教育の現場でも明らかな変革を遂げているように思える。ヴィエトナムの教育事情を語るに、一校の見学で全てを把握することは不可能である。我々が、肌で感じたヴィエトナムの教育現場を報告する事を付け加えたい。

今回の帰国青年職場訪問は女性教師をしている小学校である。残念ながらヴィエトナム語で直に話をすることは出来なかった。通訳を介した話では、日本での視察研修は大変勉強になったとのことである。研修や、ホームステイを通じて感じたことは、日本の教育レベルの高さに驚いたことだ。

Thinh Quang小学校の生徒達は朗らかで、とても活発で親しみやすかった。帰国青年が、日本で研修したことは、この学校の設備、教育方針、道德教育に活かされている。「一生懸命勉強して、素晴らしい人間になります。」と全校生徒で唱えていた光景が目に残り続けた。日本の高度情報化社会を見聞した帰国青年の提案であろう。コンピューター教室の新設、外国語教育(とりわけ英語教育)の充実には目を見張るものがあった。

Thinh Quang小学校があるこのDONG-DA地区には、学校が22校ある。この小学校の全校生徒は1,130人で1学年(1年生)は5クラス113人である。教員数は50名で、内男性はコンピューターを指導する教師ただ1人である。教室の絶対数が少なく、午前と午後に別れて授業を実施していた。

(4) 帰国青年との意見交換会

意見交換会には、平日の午後にも拘わらず、15名もの帰国青年らが集ってくれた。各々が役所、テレビ局、学校などの現在の勤め先を含めた自己紹介をした後、帰国後の日本に対する感想や当事業への活発な意見交換がなされた。青年たちからは様々な意見がだされたが、予定の1時間半の時間では各自の所感を述べるに止まった感もあった。ただ共通して言えたことは、以下の3点である。

- ・ 現況では海外に行く機会が少ない中、様々な日本を見ることができたのは大変有意義であったし、感謝している。
- ・ 特にホームステイは、日本および日本人を知る上で大いに参考になった。
- ・ もっと多くの日本青年(学生や社会人など)といろいろ話してみたかった。

交流会は、CYDECOの責任者であるロイさんや昼間来られなかった帰国青年らも加わり、山岳地方独特のお酒を飲みながら、また日本滞在時の写真を交えての楽しい時間を過ごした。

(5) JICA 事業視察：ハノイ貿易大学青年海外協力隊語学(日本語)教師現場

最初、青年海外協力隊から派遣されている猪俣先生の日本語の授業を参観した。

ハノイ貿易大学は、ヴィエトナムのなかでも1,2位を争うハイレベルの大学と聞いていたが、今回参観したのは2年生のクラスである。テキストは日本の現在の生活を歴史、文化をとおして理解する内容であった。クラスは35名(過半数は女性)で熱心な授業態度のなか猪俣先生が、日本語の「助詞」や「接続語」の用法を注意しながら進められてい

た。その後、国際協力室のズオン先生と懇談させて頂いた。主な内容は、次のとおりである。

- ・当大学は二千数百人(夜間・短期を含めると1万人以上)の学生と二百数十名の教員を擁している。
- ・日本語は、英語の次に人気が高く、数百人が受講している(講師3名)。
- ・国際交流には熱心で、日本の東京大学、早稲田大学や宮崎大学などと交流している。
- ・JICAの「青年招へい事業」にも申し込んでいるが、選抜方式が学生には厳しい。
- ・卒業生は日本企業にも数多く就職しているので、是非日本に行かせたい。

(6) Hanoi University of Technology・Japanese Language Center

日本語センター設立の経緯:日本語センターは財団法人ユースワーカー能力開発協会の全面支援の元に1994年にハノイ工科大学の強い要望から設立された。学生達の日本に対する情熱が、日本語センターの継続性を強くアピールしている。

ハノイ工科大学・日本語センターは、Hai Ba Trung地区にある。近くには風光明媚なBay Mau湖があり学園都市らしい落ちついたたたずまいを呈している。施設はハノイ工科大学3階の大講堂(500名位収容)の隣に6畳程の広さの事務所と16畳程の教室がある。

事務所には日本語授業に使用するであろう広辞苑等の国語辞典、百科事典や教科書等が本棚に整然と保管されていた。主な設備は日本製の湯沸ポット、日本語ワープロ、FAXとエアコンぐらいのものであった。教室には、二人掛けの机が15個ある。黒板はホワイトボードに専用マジックで書いていた。天井には2機の扇風機が回っていた。室内はやや暗く、我々も少し汗ばんできた。

日本語の授業を希望し教室に通う学生は全体で50人であるが、1週間に2時間の授業である。工業系の授業がメインとなるので、日本語の授業と重なる場合には、どうしても専門授業に参加するのだ。スタッフの苦悩を垣間見た。

大西先生が学生の名前を読み上げ、授業が始まった。本日の出席者数は13名(女性4名、男性9名)である。学生達が、「ふるさと」「さくら」を合唱してくれた。とても上手であった。我々の自己紹介の後、学生達が、日本語で自己紹介をした。自分達のヴィエトナム語のレベルからすると、かなり上達している。日本語の発音は易しいと思うが、聞き取りや書取り等はどうなのか。

松本団員の、インタビューではほとんどの学生は、聞き取り等が難しいと言った。日本は経済大国で、工業が発展しているので、日本語を身につけて、日本で仕事をしたいという希望が多い。また在ヴィエトナムの日本企業で働きたいと言った。

(7) ハノイ音楽院

99年1月(98年度)に教育グループとして来日した事のあるTHUYさん(この学校の民族音楽の教師でもある)と同時期に来日したHUONGさん(生徒)の案内で、ハノイ音楽院を訪れた。今回はいろいろな楽器専門学科がある中で、特に「ヴィエトナム民族音楽学科」を紹介してもらった。

イ. 民族音楽部教師(7名)による歓迎演奏

- ① 宮殿での曲
- ② ウーロントップの演奏
- ③ 北国の春(日本の名曲)
- ④ 自由の翼
- ⑤ 雨の後
- ⑥ 明るい森
- ⑦ 森の響き
- ⑧ ロマンティック

我々にとっては見慣れない楽器を十種類程使ったの歓迎演奏であった。

「北国の春」他、「さくら」「赤トンボ」等即興演奏してもらう。日本の曲がヴィエトナムの音楽にも浸透している事は興味深い事だ。

ロ. 各楽器の説明

詳しい説明は省略するが、この場で演奏されたものはどれも特別の改良を加えており、相当高価な物らしい。10数万～100万円単位まで掛かると言う。

ヴィエトナム人は楽器が出来る人が少ないとも聞いたが、これはまず、楽器自体が生活水準から比べて著しく高価なのが原因の一つであろう。

ハ. ハノイ音楽院の歴史・現状について

1956年設立、名称は「ヴィエトナム音楽学校」から「国立音楽院」を経て今に至る。生徒数も10数人から、今の1,000人以上に至っている。全ヴィエトナムを通じて、音楽関係では一番大きい学校だそうで、9歳からの入学が許され、初等部5年・中等部4年・大学部4年の13年制である。

初等～大学までのほぼ一貫教育のため、初期から楽器が出来ない子供でも入学可能な試験は設けてあるものの、やはり狭き門・高嶺の花であろう。

学科は7つに分かれ、この民族音楽科が一番生徒数が多い(350名)。学校設備は、4階建ての校舎の中に個人レッスン部屋を96部屋設けてある。しかし、1,000人と言う生徒数から比べるとその少なさや、防音等はほぼ無いに等しく、また貧しい生徒の為

に学校が保有する楽器の数もまだ足りてないとの事。あまり恵まれた環境とはいい難かった。

二. 意見・要望

- ・多額の援助が欲しい。
- ・外国(日本も含め)の民族音楽には非常に興味があるが、深く研究する機会が無いのが残念である。

5. 所感および提言

(1) 調査団所感

ヴィエトナムへの初めてのアフターケアチーム派遣であった。毎年ヴィエトナム青年の受入は行なっているが、現地で招へい青年に再会する事は出来ても職場を訪問する機会は初めてであり貴重な経験であったと思う。現地でどれくらいの青年と再会できるのか多少不安はあったが、予想以上の顔ぶれで数年、数ヶ月ぶりに顔を見合わせ懐かしさが込み上げてきた。意見交換会では、ヴィエトナムからの招へいが開始された5年前の青年から昨年度までの青年が、平日の昼間にも拘わらず数名ずつ集まり、そのまま引き続き交流会にも参加してくれた。交流会に参加できなかった青年達も夜遅くホテルまで訪ねて来た。片言の英語でも電話をかけて来てくれた青年もいた。来日青年を成田で見送ったときは再会出来るのはいつの日になることかと思っていたが、一部の青年とではあるが思ったよりも早い再会であった。

今回、来日青年の職場を訪問する機会に恵まれ、今までは青年に聞いただけの一方通行の情報でも、自分の目で設備や環境を確認でき、実際に彼等がおかれている状況を一部とはいえ把握できたことにより、今後のプログラム作成の際も訪問先を選考する参考になった。1年前の同時期の1週間、ハノイ・ホーチミンを駆け足で訪問したが、今回はハノイのみの訪問と言うこともあり、ヴィエトナムの首都ハノイを堪能できた。町並みも近代化が進む一方、煉瓦を積み重ねただけのような家も数多く残っており、生活レベルの差がますます開いていくような気がした。

テレビの報道などで見られる自転車は減り自動車・バイクの数が増加しているようである。貨幣価値で考えるとバイクを購入するのはまだまだ大変なことのようである。だが、皆バイクに乗っている。どのようにして手に入れたのかは謎である。老若男女を問わずバイクに乗っているのも、免許取得年齢を尋ねたところ50ccまでは免許取得の必要は無いと言うことであった。ヘルメットなしで1台のバイクに家族4人で乗っているのは当たり前のことであった。最近整備され取り付けられたという交通信号に対しても守る人もいれば、まったく関心が無い、という感じの人もいた。実際道路を横切

るのに横断歩道をわざわざ渡る人はほとんど無く、たまたま横切るところに横断歩道があったというような印象を受けた。道路を横切るのにも、タイミングが分からないとなかなか大変である。横断者が困るだけでなくバイクに乗った人にも迷惑をかける。横断者は普通に歩くつもりで、バイクも進行してくる。歩行者が急に止まると運転手もタイミングを外されてしまう。何回か横切ると阿吽の呼吸というか段々こつが分かってくる。地元の子供にしても実に上手に横切る。日本では考えられない状況でもある。この国で育った人々、特に我々の出会ったヴィエトナム人は素朴で従順で義理堅く恩を忘れない、という我々が忘れかけた気持ちを持ち合わせている国民である。また本を読んだ印象では、女性はしっかり者で強いイメージであったが、私の印象では、時にとても恥ずかしがりの部分を持ち合わせている気がした。その反面、よく言われているように男性に対しては非常に強い一面を垣間見ることもあった。我々は、現地で来日青年に再会出来たことに感謝する気持ちでいっぱいであったが、来日青年側は、日本での研修期間に世話になったのだから、今度は我々が世話をするのは当然である、という考え方のようだ。こちらは、そんな気は全く無いのでそういった態度を取られ恐縮してしまう場面が何回かあった。貨幣価値が違うのは、一目瞭然である。ホテルのすぐ隣にお土産用のTシャツを売っていた。金額を確かめると150円であった。そんな環境で生活する彼等が、来日した際お金を少しでも残したい、自国へ戻ってから使いたい、というという気持ちが少し理解できた気がした。彼等は皆、日本へ再び行くことはほとんど不可能であろう、と言っていた。ハノイからホーチミンへの移動も簡単に出来る事ではない。来日青年は通常ハノイに集合する。ハノイへ行く事さえも初めてだったという青年の話も何回か聞いた事があった。まして、海外へ行くなんてことは、想像も出来ない事であったかもしれない。ヴィエトナムから出国するには、査証の取得は非常に困難である。我々がヴィエトナムへ行くのとは事情が異なる。日本への観光ビザは無いそうで、パスポートも簡単には取れない。時間もお金も想像以上にかかる。そんな中で選出され日本へ研修に来るという事は非常に名誉な事である。そういった話を聞くと青年招へい事業で来日できた青年の1ヶ月弱という限られた研修期間は悔いの残らないものであるよう、受け入れ側の自己満足にとどまるのでなく来日青年側が一生に一度のものとして満足出来るプログラムを実施していかなければならないと思った。

(2) 団員所感

イ、徳原忠利「熱い心にふれた、帰国青年との再会」

私は、青年招へい事業アフターケア調査チームに参加して、貴重な体験をした。ヴィエトナム青年達との交流会や、施設訪問、そして民家訪問は驚きの連続だった。現地の人たちと、直に対話することで内なるヴィエトナムの姿を、垣間見ることが出

来た。

1998年2月に、青年招へい事業で来日したヴィエトナム青年のホームステイを初めて引き受けた。今年の2月に再びホームステイを引き受け、地方プログラムの手伝いもさせてもらった。その時に、ヴィエトナム青年の通訳や、身の回りの世話をした宮崎大学の留学生達とその後大変親しくなった。ヴィエトナムに帰国した彼等に会うのも楽しみだった。

アフターケア調査目的は、帰国青年との再交流を通しての両国間の相互理解である。また、意見交換で出た要望等を日本におけるプログラムの改善に役立てることだ。出発前に立案した調査内容どおりにできるか、不安が脳裏を過ぎった。帰国青年職場訪問、JICA現地事務所、CYDECO、日本語センター等を視察した。ヴィエトナムに対する偏見や、誤った知識はもろくも崩れ去った。ヴィエトナムの人々が、多方面に創意工夫、努力している状況を多くの日本人にも知って欲しい。

<施設見学>

全体的に施設は、掃除が行き届ききれいにしてあった。空調設備のある部屋は、ほとんどなく、天井には大き目のファンが回っていた。背広姿の私たちには、少し暑苦しいと感じた。建物の構造的問題なのか、小学校や大学の教室はやや狭く感じた。真夏の暑さ対策を考えると想像も出来ない。

学校の施設で気になるのは、体育施設だ。国の予算的な事情もあると思うが、専用の運動場や体育館等の施設はない。中庭程度の広さの中で体育授業が行なわれている。しかも、セメント敷きのグラウンドである。生徒たちは元気に走り回っていた。「けがをしないようにな。」と思わず祈った。大学のキャンパス(屋外)には、バレーボール用のネットが張っており、休み時間には学生達でにぎわっていた。

音楽院の民族音楽科を訪問した際に、先生達から「日本の伝統芸能に対する国の支援はあるか。」と質問があった。ヴィエトナムの若者達が、伝統芸能を守ろうとする意識が薄れているという。日本でも、学校での指導もほとんど見られないし行政としても援助が少ない。日本の伝統芸能も民間団体(保存会等)に、その活動を委ねられている。音楽院の民族音楽科の予算も、他の西洋音楽(ピアノ、バイオリン等)と比べると格段の差があると言う。民族音楽の楽器は高価で、学校で練習する学生が多い。

ヴィエトナム支援は、インフラ整備ばかり目に付いてしまうが、教育・福祉にも目を向けて欲しい。また、環境問題も今後重要になってくる。工業化が進めば、日本が過去に経験した公害問題も発生する。上水道や下水道の整備も健全な生活には欠かせない。ハノイ市の中心地は、大きな観光資源であると思う。海外からの旅行者が多く見られた。ホテルの従業員の接客方法や対応も一考して欲しい。一生懸命な姿は感銘

を受けた。

<帰国青年とのふれあい交流>

入国審査、税関の手続きを済ませて、到着ロビーにつくと、HUENさんとBINHさんが出迎えてくれた。私のボストンバッグの中は、彼女たちの教科書等で一杯だ。私のハノイ訪問の1週間前に彼女達は帰国した。出迎えありがとう。

帰国青年との交流会で日本滞在について話を聞いた。日本での合宿セミナー、ホームステイがとても良かったと彼女たちは口々に言った。専門分野については、ゆっくりと見学する時間が少なかったと指摘された。顔見知りの青年との懐かしい対面である。私の家にホームステイしたThangさんとは、1年半ぶりの再会であった。我々のスケジュールを熱心に聞いた。ぜひ家に来て欲しいとの誘いであった。

Com Lam Pao Bo での夕食会はとても楽しかった。CYDECOの所長の挨拶があり、瓶に入った酒に竹製のストローを差し込んで飲んだ。うまかった。我々を入れて総勢20名であった。私は手書きの名刺を持って、できるだけ多くの青年と話をした。青年達はもう一度日本に行きたいと話した。また、ハノイにもぜひもう一度、家族連れで来て欲しいと誘いがあった。

Thinh Quang 小学校のNgo Phi Khanhさんと学校間交流の話をした。学校を訪問した際に、校長先生にも学校間交流の話をしたところ、ぜひやりたいと言ってくれた。日本とベトナム、小学校の交流が始まれば素晴らしいことだ。

帰国青年の心温まるもてなしには本当に頭が下がる。我々のスケジュールの合間に職場から、学校から、バイクに乗って駆けつけてくれた。公式行事では行けない若者の集うお店にも案内してもらった。若者のパワーを感じた。

ロ. 松本 想「アフターケア調査チームに参加して」

私は1997年夏のベトナム教育グループの合宿セミナーに参加した関係で、今回アフターケアチームの一員として渡越した。毎年、色々な職業・専門分野のベトナム青年が来日し、1ヶ月という短期間ではあるが勉強し、満足して帰っているように感じていた。しかし、私が知りたかったのは、彼らが本当はどう感じていたのか、我々にどうして欲しかったのか、我々にこれからは何を求めているのか、我々に伝えたいことはどんなことなのか、であった。また、受け入れ青年以外のベトナムの人々は何を考えているのか、ベトナムとはどんな所なのか等々、心に抱いたさまざまな疑問について意見・要望を調査するべく、現地の小学校から大学等を訪問した。

私は初めての渡越だった。進んでベトナム青年との合宿セミナーに参加する程

元々この国は好きだったので、渡越前には特に関連する本を読み漁った。しかし「辛抱強いがおとなしい。」「経済成長はこれからの社会主義国。」「交通法規はないに等しい。」「ヴィエトナム女性と結婚するのは大変だ。」等々、見方によっては固定観念にとらわれそうな文面が多かった。なるべく、そんな固定観念にとらわれないように考えて臨んだ訪問について記してみる。

ノイバイ空港を降りた瞬間から、むっとするような暑さであった。10月のハノイだと言うのに、この熱気はすごい、と思った。空港には期せずして、同行の徳原氏のホームステイ関連での友人達が出迎えにきてくれていた。笑顔が嬉しかった。とても義理堅いと感じた。

道は、どこもかしこもバイクと自転車、わずかの自動車で埋め尽くされていた。車線はないに等しく、対向車線からはバイクや車が突っ込んできていた。しかも路面は、足をくじかないのが不思議なくらいデコボコであった。信号は昨年できたばかりで、当然、横断歩道もほとんどなかった。街では、道という道に、小売り商店がびっしりと軒を並べ、皆が商人のような活気のある状況であった。皆が物を売っていたり、何か食べていたり、子供をあやしていたりして、休むことなく活動していた。

先にも述べたように、帰国青年達は皆義理堅い。中には会社勤務の人や女優業の人もいて本当は忙しいはずである。それにも拘わらず、少ない時間に多くの帰国青年が会いに来てくれた。初日の空港に始まり、泊まっているホテル、送り迎え、食事、意見交換会や交流会もそうだが、たとえ少ない時間しかなくても、必ず顔を見せて声を掛けていつてくれた。誰か一人がそうだとするのではなく、一様に皆そうなのだ。これには、嬉しいと同時に、敬服させられた。彼らは我々にたくさんのことを伝えたいから「1週間しかない滞在」だが、「1週間もあるじゃないか。」と思って来てくれたのであろう。彼らは、少しの時間でも共有できることが嬉しい、と考えてくれていたに違いない。

その一方で、意見交換会やその後の交流会でも、彼らは「日本に行けて良かった。」とか「良い機会だった。」とか「嬉しかった。」とか、良いことしか言わなかった。その後個人的に話をしても、彼らはあまり否定的なことは口に出さなかった。彼らの本音はもっと長い時間をかけなければ聞き出せない、と感じた。

帰国青年を始め、人々は皆素朴だった。我々の持っていない何かを彼らは持っている。この国が好きでこの国で暮らしている日本人の方々にも会う機会があった。きっかけや仕事ぶり、プライベートのことなどを話してくれた。どの人も満足そうな笑みを浮かべていたのが印象的だった。この体験をただの思い出にしないために、またヴィエトナムを訪れようと思う。そして、今後我々の後に続いて多くの人が来られるように、機会があるごとにこの体験を話そうと思う。

ハ、小倉正恒「遠かったヴィエトナム」

「ハノイの街は、危険が一杯」、これが到着初日の印象だった。市内の狭い道には車、バイクそして自転車が押しのけあって走り、その中を歩行者が器用に横断している。“ああ、危ない”何度そう思ったことか。後で聞いた話では、交通信号機の本格的な設置も昨年からだそうだ。

私は、“遣り残した宿題をやらねば”、そんな気持ちで今回のプログラムに参加した。昨年、受入れ側の一人として来日したヴィエトナム青年たちと合宿した際、社会・経済をはじめいろんな話をした。言葉の壁もあったが、ヴィエトナムの状況がはっきりと掴めないことが壁を高くした。アフターケアにメンバーの一員として参加できるチャンスを得て、できる限り「見て、聞いて、感じて」あの“もどかしさ”を自分なりに解消しようと心に決めてきた。まず、来てわかったことは、物価があまりに違うことである。「ガリバー旅行記」ではないが、街の青空床屋は日本円で120円、しかも何でもまずは交渉ありきであった。散髪にしても最初は200円から交渉がはじまり、こちらが“相場は100円位”と問うと、“いや120円でとこだね”と笑顔で答えられた。交渉といっても、言葉のキャッチボール感覚なのだろうか。

昨年来日した青年たちは逆の感覚に大いに悩まされただろう。我々の感覚に変換すれば「うどん一杯、5,000円、ジュース一本600円」と言ったところだろうか、青年達にとって物を買うことは信じられない位に高価だったはずだ。また慣れない定価販売にもさぞ戸惑ったことだろう。我々が6声もあるヴィエトナム語を難しいと感じるのと反対に青年らにとって、漢字、カタカナ、ひらがなと英語など組み合わせられた日本語もまた非常に難しい言語に違いない。できるだけ相手の視点に立って対話することが国際交流の基本であることは、わかっていたつもりだった。たった何日か滞在しただけでも自らの至らなさを痛感し、昨年の合宿時にでももっと相手に気を、そして心を配るべきであったと非常に反省した。

ただこの事は、日本の開発援助にもきつと言えることだろう。日本側の良かれと思う援助と相手国の求める援助は、必ずしも一致しない。例えば電気、水道をはじめとするインフラが不十分の国では、芸術や教育施設への優先順位は高くないし、また時には、政治的な問題も絡んでしまう。我々が利用したハノイの空港も施設が不十分で、日本の政府援助と協力で新ターミナルを計画していたそうだが。しかし現地では軍民共用空港での利用を求めた為、軍事協力に繋がるものは日本の援助規定に抵触し、結局その話は止まってしまったそう。

私は、どんな場合でも粘り強く対話することから解決策や理解が生まれてくものと信じている。ただ、それには“継続”が不可欠だ。「青年招へい事業」も相手国青年らを招くだけでなく、何人かでも日本青年を訪問させる機会を用意することによ

て、相互理解が深まり、またそれを持続することにより両国間の友好が発展していくだろう。そして「エネルギーで優しいヴィエトナム」をもっと身近にすべく“自分の感じたこと、考えたこと”を多くの人に伝えることをお約束して所感といたしたい。

(3) 問題点と提言

イ. 問題点

- ① 青年招へい事業は、派遣側の国々から高い評価を受けている。参加した青年達も、「一生の思い出」と言っているようだ。ただ同じグループでもそれぞれの専門分野が違うので、日本国内の視察も画一的でなく、もう少し時間をかけてゆっくり見たいとの意見を聞いた。
- ② 来日青年の年代が高いのではないか。
- ③ 今回交流会等で会うことのできた青年達は、主としてハノイ近郊の教育グループや公務員グループで訪日した人が多く、経済グループは少なかった。

ロ. 問題点の原因または理由

- ① 東京での文化的プログラムと地方の文化的プログラムに重複等があるのか、時間がかかり絞られてくる。また団体行動のため、どうしても通り一遍の視察や説明になってしまう。
- ② 国としては20代、まして10代の若者が日本や米国を訪れるのは時期尚早と判断しているようである。
- ③ 経済グループの青年の参加が少なかったのは、ヴィエトナム側の連絡が、組織だったものではなく事務局(CYDECO)の人脈によったものであったためである。

ハ. 提言

- ① どれくらいのレベルの専門家がいるかわかりにくいですが、青年募集のときに視察希望を書いてもらう。団体行動が途切れるのは、地方プログラムのホームステイであるので、受入のホストファミリーにもその旨を伝えるようにして欲しい。地方プログラムの実行委員もそのような場合には、各種学校、企業、団体に働きかける。青年の一番見たいもの、知りたいものを把握するよう努めて欲しい。
- ② 幾つかの大学を訪問して見て、短期間で経済成長した日本に対する関心は非常に高く、是非、こうした学生らに日本訪問の機会を作りたいと強く感じた。現在ヴィエトナムの訪日グループには「学生グループ」がないため、「学生グループ」の創設を希望するが、早急な対応が困難な場合には、日本大使館推薦に数名でも枠をお願いしたい。ヴィエトナムで開かれている「日本語スピーチコンテスト」で

の優秀者に「日本大使賞」などという形で訪日の機会を多く作ることで、一部に見えにくいとの声もある日本の国際協力をアピールする意味にも、日本語普及のインセンティブにも双方に繋がると考える次第である。

- ③ 毎年、多くのヴィエトナム青年を日本に招き、そして良き友人関係を築いていく上でも同窓会組織等の連絡機関は日本側にも、また訪日した青年達にも有効かと思う。強く相手国に促すと共に、日本側も大使館やJICAが同窓会パーティーを開催し、日本青年も含めての再交流の支援を継続することこそが大切である。

ネパール

平成 11 年 10 月 26 日～ 10 月 31 日

社団法人 駒ヶ根青年会議所

I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ 招へい青年の日本での研修成果が、帰国後どのように活かされているか調査する。
- ・ 帰国青年の所属先の学校及び周辺の学校に与えた影響を調査する。
- ・ 関係者との意見交換や教育の現場を視察し、今後のプログラム改善に寄与する。
- ・ ネパールの教育事情、教育環境、学校設備等を視察する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団事務所訪問

- ・ ネパールの一般事情、青年招へい事業の運営状況概説

(2) 帰国青年との面談

- ・ 帰国後の活動状況聞き取り及び、招へい事業に関する意見交換と要望事項聞き取り

(3) 帰国青年活動現場訪問(学校訪問)

- ・ 帰国青年が滞日経験をどのように現場で活かしているか視察
【訪問先】

- ・ Janapriya See School (ボカラ)
- ・ Mahendra Higher See School (ネパールガンジ)
- ・ Suryodaya Secondary School (ネパールガンジ)
- ・ Bal Udyan Secondary School (カトマンドゥ)
- ・ East Pole Secondary School (カトマンドゥ)

(4) ボカラ市役所表敬訪問

- ・ ボカラ市の教育事情の聞き取り
- ・ ボカラ市との交流を深める

(5) 郡教育事務所訪問

- ・ 帰国青年の滞日経験が与えた、地域の他校への影響について
- ・ 郡内の教育事情についての聞き取り

3. 調査団員

	氏 名	所 属 先	青年招へい事業との関わり
リーダー	宮沢 重明 ミヤザワ シゲアキ	(社) 駒ヶ根青年会議所	'97、'98 分野別地方プログラム担当 '99 分野別都内・地方プログラム担当 (いずれもネパール王国 教育分野)
メンバー	下平 和宏 シモダイラ ヒロシ	(社) 駒ヶ根青年会議所	'97、'98 分野別地方プログラム担当 '99 分野別都内・地方プログラム担当 (いずれもネパール王国 教育分野)
メンバー	野溝 一雄 ノミゾ イサオ	駒ヶ根市役所	'99 分野別都内・地方プログラム担当 (ネパール王国 教育分野)
メンバー	樹村 茂樹 ツムラ モリキ	全日本空手道連盟	都内プログラムでの演武歴 10 年

II. 調査結果

1. 日程

10月26日(火)

- 12:35 カトマンドゥ・トリブバン空港着
- 13:00 JICA 現地事務所担当者と打ち合わせ
- 16:15 トリブバン空港発
- 16:45 ボカラ空港着
- 17:00 ホテルブルーバードチェックイン
- 17:30 帰国青年3名と面談(ホテルにて)

10月27日(水)

- 08:45 ホテルチェックアウト
- 09:30 ボカラ市役所訪問
- 10:30 Janapriya Sec School 訪問 学校視察
- 11:15 空港着 昼食
- 12:35 ボカラ空港発
- 13:10 トリブバン空港着
- 14:40 トリブバン空港発
- 15:40 ネパールガンジ空港着
- 16:00 ホテルバチカチェックイン
- 17:30 帰国青年2名と面談(ホテルにて)

10月28日(木)

09:45 ホテルチェックアウト
10:00 バーキー郡教育事務所訪問 教育事務所長と面談
10:30 Mahendra Higher Sec School 訪問 学校視察
12:30 Suryodaya Secondary School 訪問 学校視察
14:40 空港着 昼食
17:10 ネパールガンジ空港発
18:15 トリブバン空港着
18:45 ブルースターホテルチェックイン

10月29日(金)

09:15 ホテル発
09:30 国青年5名と面談(JICA事務所にて)
11:45 Bal Udyan Secondary School 訪問 学校視察
14:30 East Pole Secondary School 訪問 学校視察
16:30 JICA事務所報告
17:30 ホテル着

10月30日(土) 終日カトマンドゥ市内視察

10月31日(日)

11:15 ホテルチェックアウト
14:00 トリブバン空港発 帰国

2. 主要面談者

(1) ボカラ帰国青年

1996年招へい 教師

Ms. Saraswati BARAL

Ratna Pandey Lower Secondary School

Ms. Kamala WAGEL

Sangam Primary School

1998年招へい 教師

Ms. Sabitri CHALISE

Janapriya See School

(2) ネパールガンジ帰国青年

1998 年招へい 教師

Ms. Vimala SHAHI

Mahendra Higher Sec School

Mr. Jaya Prakash SHAHA

Suryodaya Secondary School (校長)

(3) カトマンドゥ帰国青年

1996 年招へい 教師

Ms. Biva Kalika SHRESTHA

Bal Udyan Secondary School

Ms. Devaki ADHIKARI

Bisnumati School

Ms. Hajuri SHINGH

Shree Mahankal Jan Jagrit School

Ms. Nirmala SAPKOTA

East Pole Secondary School

Ms. Lalita RAJBHANDARI

Annapurna High Sec School

(4) ポカラ市役所

Mr. Krishna THAPA

Mayor (市長)

Mr. Bahadur Gurung

Deputy Mayor (助役)

Mr. Chudamani Pahari

Ward Chairman (区長)

Mr. Yogendra Basnet

District Education Officer (郡教育長)

(5) JICA 事務所

矢部哲雄

国際協力事業団ネパール事務所次長

(6) 現地通訳

中村敏郎 (和－ネ)

国際協力事業団ネパール事務所

王藤美佳子 (和－ネ、英－和)

国際協力事業団ネパール事務所

Mr. Madhav KHADKA (英－ネ)

国際協力事業団ネパール事務所

Ms. Anita SHRESTHA (和－ネ)

Women's Creation

3. 調査結果概要

今回の調査では主として、帰国青年との面談により、帰国後の活動状況の聞き取りと招へい事業についての意見交換及び、赴任先への学校訪問による活動現場の調査を行った。

その結果として、日本での研修成果やそれに対する周囲の評価等を知ることができ、今後の招へいプログラムの作成、改善に役立つものになった。

しかしながら、バンコクでの飛行機乗り継ぎの際のトラブル(オーバーブッキング)に

より、現地入りが予定より1日遅れてしまい、JICA事務所表敬訪問がキャンセルとなった他、ポカラでの調査時間が多少短くなってしまった。

また、ネパールガンジでは我々の英語力不足と、現地通訳の日本語力不足により十分なコミュニケーションを図ることができず残念であった。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 帰国青年との面談

イ. ポカラでの帰国青年との面談(3名)

簡単な自己紹介の後、青年たちに日本での研修成果をどう活かしているかの説明を受けた。彼女たちは、ネパールにおける教材不足を訴えてはいたが、自分なりに工夫をして、周りにある物を利用した授業を行うよう努めていることが分かった。

また、従来の先生が生徒に一方的に説明をするだけの授業ではなく、生徒とコミュニケーションを図りながら行うよう教え方の改善をしていることが分かった。

さらに、海のない国で育ったネパール人は、日本で実際に海を見たことで、自分たちの実体験を通した海の説明を子供たちにすることが出来大変良かったと話していた。

その他、日本で見たことや体験したことは全て生徒、同僚に話をして出来る限りの改善を呼びかけている様ではあるが、教育に対する意識の違いや物不足(経済的要因)によって、思うようにならないことが多いとのことであった。

最後に、日本での研修は全てが良かったが、時間が短かった事を3名とも訴えていた。

ロ. ネパールガンジでの帰国青年との面談(2名)

ここでは、帰国青年たちが日本で授業の仕方(教え方)を学んできた事を強調していた。教え方の改善により生徒の授業に対する態度、出席率の向上、先生の教育に対する姿勢が大きく変わり、自主的に学校を改善しようとする動きも生まれ学校全体の雰囲気まで変わってきたとのことである。

また、ホームステイでの生活は日本の文化や生活様式を知る上で大変参考になり、子供たちも大変興味深く日本に関心を持つようになったようである。

そして、日本人の時間を守る習慣をネパールの学校でも取り入れようと努力をしているとのことであった。

最後に、もう一度日本に行くことが出来たら、自分たちの知らない新しい教え方をもっと学びたいと述べていた。

ハ、カトマンドゥでの帰国青年との面談(5名)

ここでの面談は、時間も十分あり帰国青年も5名、通訳も2名いて一番成果の上がる調査が出来た。

① 学校での主な改善点

a. クラスの少人数化

以前は1クラスあたり100人を超える学級もあったが、可能な範囲で少人数化を図った。

b. 新しい授業(科目)の取り入れ

音楽の授業やダンスの時間といった、従来に無い科目を取り入れた。また、そのために音楽室を設けたり、ピアノを日本から持ち込んだ先生もいた。

さらに、課外授業として、空手教室を始めた学校もあった。

c. 先生の役割の分担化

PrimaryとSecondaryの両方が共存している学校でも、従来までは一人の先生が、PrimaryとSecondaryの両方の授業を受け持っていたが、それぞれの教え方に応じてPrimaryを受け持つ先生とSecondaryを受け持つ先生とを明確に分けた。

d. 衛生面での配慮

日本の学校では、玄関で上履きに履き替えていたので、全てではないが、特定の部屋に入る際には靴を脱ぐ等の工夫を始めた。(当然室内も裸足でいられる状態にしてある。)

e. 教室内のビジュアル化

以前まで教室内は殺風景であったが、生徒の描いた絵を壁に貼って明るい雰囲気を作り出すと共に、アルファベットや九九の表を貼って授業に役立てている。

f. 教師のスキルアップ

帰国青年が日本の研修成果を同僚等に十分伝えたことにより、先生の教育に対する意識変化や自主性が生まれ全体のスキルアップに繋がった。

② その他改善に向け努力したこと

a. 周囲の学校にも日本の研修で学んできたことを広めようとしたが、必ずしも理解されなかった。

b. 教材を使った授業を試みようとしたが、やはり教材不足は深刻な問題である。自分たちで工夫はしているが限界がある。

③ 招へいプログラムへの要望

a. 授業の仕方、教え方について

生徒への教え方についてもっと学びたい。具体的には、もっとたくさんの授業風景を見てみたいし、可能であれば自分たちも日本で教壇に立ってみたい。(日本の教育実習の様なもの)

b. 合宿セミナーの時期について

合宿セミナーでは、日本人のものの考え方や、生活習慣、人生観といった一般的な知識の習得及び交流は十分出来たが、学校での教え方や教育に関する深い討論は十分出来なかった。学校訪問を合宿セミナーより前に行い、日本の教育の現状を良く知ってから合宿セミナーを行えばより深い討論ができるのではないか。

最後に日本での研修全体を通して、「日本の文化や考え方が良く理解でき、教育システムや学校設備等の教育環境が良く整備されていて素晴らしいと感じた。」「ホームステイ等でのホスピタリティーも大変良く親近感を感じた。」等の感想をいただいた。

(2) 帰国青年活動現場訪問(学校訪問)

イ. Janapriya See School (ボカラ)【生徒約 2500 人 教員 40 人 公立】

ここでは訪問時間が短く十分な視察が出来なかったが、理科の授業風景を見ていたところ、紐の先にボールペンを繋いで振り子を作るなど、先生自身の手作りの教材を数点用いて行っていた。

ロ. Mahendra Higher See School (ネパールガンジ)【生徒約 1000 人 教員 18 人 公立】

従来の授業では、先生が黒板に書いた物を生徒がひたすらノートに写すだけであったが、招へい青年が帰国後は、先生が例題を解き解説を加えた後、生徒に問題を実際に解かせ、質問を受けるといった教え方に大きく変化した。この結果生徒の学力が大幅に上がったとのことであった。

また、校長室に進学率や就職率のグラフを掲示するなどの工夫も見られた。

ハ. Suryodaya Secondary School (ネパールガンジ)【生徒 735 人 教員 12 人 公立】

ここでは、教材の充実が顕著であった。帰国青年が校長兼理数科教師ということもあり、十分とは言えないが実験器具、標本、解説図等が揃っていた。これらの教材は青年が帰国後、郡の教育事務所等に掛け合い、補助金をもらったり、生徒や親の募金を募り買いそろえた物である。

また、“エコクラブ”と呼ばれる課外活動を行い、生徒が校内や学校周辺に植樹など

をしていた。その他にもマネークラブと名付けて、生徒たちが自分たちのお金を少しずつ出し合い、そのたまったお金の使い道を生徒自身に考えさせるような教育も始めたようである。

その他にも赤十字活動を子供たちが始めるなど、日本での研修成果が良く現れていた。

二、Bal Udyan Secondary School (カトマンドゥ)【生徒 345 人 教員 30 人 私立】

この学校は私立であり、また、帰国青年が経営者の妻であることから改善が著しい。生徒への教え方の改善から始まり、音楽室(ダンス室)の新設、日本式の古タイヤを利用した遊具の設置等を行っていた。また、衛生面の配慮として、教室以外の部屋は土足厳禁にするなどの工夫も見られた。

これらの改善は、学校の評判アップにもつながり入学希望者も増えているらしい。しかし、経営自体は非常に厳しく、家賃が払えぬならこれ以上建物に手を加えることは許可できないと言われ困っている様子であった。

ホ、East Pole Secondary School (カトマンドゥ)【生徒 350 人 教員 25 人 私立】

この学校も私立であり、帰国青年が経営者の妻であったため改善が著しい。学校内では全て英語で会話をするなど教育方針が明確であり、先生方の教育に対する意識も非常に高いように思われた。特に、日本で学んだ教え方を実践することにより、先生も生徒も自主性が大幅にアップし、学校全体で改善に取り組んでいる様子が良くわかった。この結果この学校も大変評判が良くなり生徒数が毎年増加しているようであった。

そして、この学校も青年が帰国後に古タイヤを利用した遊具を作っていた。

(3) ポカラ市役所訪問

駒ヶ根市と交流が深いポカラ市役所を表敬訪問した。予定より30分ほど早い訪問であったので、助役Bahadur Gurung、郡教育事務所長Yogendra Basnet、市事務局長Janma Jaya Regmi、評議員Chudamari Pahari 外2名の方が応対してくださった。

ポカラ市の訪問団が、本年8月に駒ヶ根市を訪れている。助役、ボードメンバー全員が訪問を希望されたようだが、若い人を中心に派遣したとのことであった。ポカラ市は、面積55km²、人口157,500人、1～8の区に分かれている。ボードメンバーは22人いる。

ポカラ市には、公立・私立あわせて131の小中学校があり、高校も12あるほか、大学の施設が14ほどあるということだ。

30分ほど遅れてタパ市長がカトマンドゥから駆けつけて来ていただいた。友好都市提携に大変期待されており、駒ヶ根市長からの親書を朗読し、お土産をわたし再会を期して席を立った。

(4) 郡教育事務所訪問 (BAKE 郡)

郡内の教育施設は、プライマリー 144、ミドル 22、セカンダリー 28 の学校のほかりソースセンター 10、村の事務所 46、市の事務所 1 である。

教育事務所長は、2名の帰国青年の影響は郡内全域におよび、大変意義のあるものであったと述べていた。従来のネパールにはない教え方、発想、創意工夫が必要であることが郡内の他校の先生にも伝わり、郡全体の教育レベルアップにつながっているとのことであった。

また、この地区の就学率は65%で、残り35%が就学しない理由は、主に金銭的な問題と加えて親の教育への無理解にあるとのことである。教育のための費用は、1年から3年の低学年は無料で、4年生から教科書代が必要になる。親の就学率の低さが影響しているようである。

5. 所感および提言

(1) 調査団所感

我々は、過去5年間に4回の地元中学生のネパール派遣事業、1回のネパール中学生招へい事業、そして3回のJICAのネパール青年招へい事業を経験しており、ネパールの文化や生活環境、教育事情についてそれなりの知識を持っているつもりであった。しかし、現地での経験は我々の想像を超えた部分が多く、常に驚きと感動を与えてくれた。

特に、我々を出迎えてくれる時の歓迎ぶりには感動の連続であった。今年度招へいした青年の内4名が、空港までわざわざ出迎えに来てくれたのを始め、どこの学校でも生徒たちが手作りの花輪や花束を持って歓迎して下さり本当にうれしかった。

一方で、実際の教育現場は学校設備を初め驚くべき環境にあった。とにかく狭く、暗く、暑い教室の中に数十名から多ければ100名を超える子供たちが、押し込められるようにして授業を受けていた。我々が訪問した学校は全てが都市部の学校である。村の学校へ行ったらどんな状況なのだろうか、写真等では見たことがあるがおそらく想像を絶する状況なのであろう。

このように劣悪な状況下で帰国青年たちは、本当に日本での研修成果を発揮できるのだろうか。そんな疑問が当然のように浮かんできたが、青年たちの話を聞くにつれ、そして子供たちの光り輝く瞳を見ているうちに、その不安は次第に解消されていった。

従来のネパールの学校では教科書も満足になく、先生が黒板に書いたことを生徒がただひたすらノートに写すだけといった授業がほとんどであったようである。しかしながら青年たちが帰国後は、教え方も生徒たちとコミュニケーション取りながら行う方法に徐々に改善され、先生たちは教育に対する姿勢が変わり、生徒たちもやる気が出てきて、学校全体に活気が出てきたという話を聞き、招へいプログラムの意義が十分に実感できたことは大変喜ばしいことであった。

また、教え方だけでなく、教材の作成、校庭への遊具の設置、課外授業の取り入れ、衛生面での配慮等々様々な改善がなされていたことも重要であった。

そしてさらに、これらの改善が帰国青年の学校だけでなく、徐々にではあるが周囲の学校にまで影響をおよぼしていることは大変素晴らしいことである。

正直なところ、日本とネパールでは環境の違いが大きく、研修成果はあまり出ていないのではないかと考えていたが間違いであった。彼らは彼らなりに精一杯努力して、出来ることから着実に一步步歩んでいる事が実感でき本当に良かった。

しかしながら、それぞれの学校によって改善の差は出ている。やはり私立の学校の方が改善が著しく、校長等の立場のある先生が研修を受けた学校も成果が上がっている。また、同じ地区から複数の青年を選出することにも効果があるように思われる。同じ年度に同じ事を学んできた青年が複数いたカトマンドゥでは帰国後にも青年同士が情報交換を行い、協力して改善に努めていた様子がみてとれた。ネパールガンジでも程度の差はあっても同様の成果が生まれていたように思われる。

最後に、今回の調査を終えて感じたことは、今後も青年招へい事業に関わり、今回の調査で得た知識と経験を活かしていきたいと思ったことである。

(2) 団員所感

イ. 宮沢重明

今回の調査で、私が一番怖れていたことは、ネパールガンジへ行かなければならないことであった。ネパールへ派遣された協力隊OB、OGに話を聞いても、ここでは表現できないような恐ろしい話ばかりであり(多分脅かされただけであろうが)本当に不安であった。しかし、実際に行ってみると、確かに町は埃っぽくて汚く、ホテルの部屋の暗さにも閉口したが、ちょっと郊外へ出れば、のどかな風景が広がり大変に素晴らしい所であった。特に我々が訪問した Suryodaya Secondary School は国立公園のすぐそばにあり、日本の子供たちもこんな自然環境の中で勉強できたらと思わせる場所であった。そして、個人的にももう一度この地にやって来てのんびりしたいと感じさせられた。

また、ボカラ市内のホテルで帰国青年と面談中に、ネパールに派遣されている協力

隊員数名と偶然お会いすることが出来た。隊員の中の数名は昨年駒ヶ根訓練所でネパールからの招へい青年と交流をしており、面談中のMs. Sabitriは再会を大変喜んでいました。この結果、我々は30分ほど面談を中断せざるを得なかったが、招へい青年と協力隊員が現地で再び交流できた事は大変素晴らしいことであると感じた。今後も機会をみて交流を続けて欲しいものである。

実際に調査に行くまでは、青年たちは帰国しても研修成果を活かしていないのではないか、というような意識でいたが、結果は見事に裏切られた。本当に本当によく頑張っていた。青年招へい事業の受け入れ団体の一員として本当に嬉しかった。我々の努力の成果を自分自身で見ることが出来たのである。こんな感慨深いことはない、この感動を仲間全員に伝えたい。

しかし大きな不安も浮かんでくる。ODAによる援助、NGOによる援助、いったいネパールという国はいつになったら自立出来るのだろうか。水を撒いても水を撒いても全てを吸い込んでしまい、決して作物の出来ない砂漠のような国に思えてしまう。国際交流、国際支援、国際貢献、これらの言葉をあらためて考えさせられる。そんな意味でもネパールは本当に興味深い国である。

最後に、今回の調査を終えて感じたことは、もし可能であるならば、今回の経験を十二分に活かし、もう一度ネパールの教育分野の青年たちを招へいしてみたいと思ったことである。きっと素晴らしいプログラムが出来ると違いない。

ロ、下平和宏

私の所属する(社)駒ヶ根青年会議所は、当地にある駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の御指導、御支援によって国際的な事業を行っている。とりわけネパールとこの地域のつながりは深く、ネパールへの中学生派遣、NGOによるネパールの識字教室などへの支援を行っている。97年からはネパール青年招へい事業に携わせていただくようになり、今回アフターケア調査団の一員としてネパールへ行く機会をいただいた。

ネパールといえば、世界の中で何番目に数えられる貧しい国、世界の多くの国から支援を受けている国、農地の面積は多いのに食料を輸入している国というように経済的な面でいえば自立していない国なのであろう。しかし、我々のもとへやって来た青年たちは、皆さん熱心で真面目で明るい人が多いという印象があり、少し疑問を感じながら調査が始まった。

調査をするために訪れた学校、施設での歓迎、面談した青年たちの歓迎はとても盛大で暖かく、とても感動した。カトマンドウで訪れた私立の学校の壁に「お客様は神様が人間の格好をしてこの世に来ている。だから大切に歓迎しなさい。」という言葉が

英語で書かれていた。ネパールではお客様を大切に思い心から歓迎する。また、人との出会いを大切に思い感謝の心で接する、といったことが昔から引き継がれている国なのであろう。我々も学ぶべき事でありとても感動した。それと共に前段で述べた疑問が少し解消されたような気がした。

学校の施設は日本の学校とは比べ物にならないものであった。小さな教室に100人くらいの子供達が席に座っている。教材らしいものは少なく、先生が工夫して作った教材を使い教えている。電気も無く暗い部屋。我々が訪れた学校は、カトマンドゥ、ボカラ、ネパールガンジといった都市の学校であった事を思うと考え深いものがある。

日本の学校教育ではこれまで多くの知識を一方向的に教え込みがちであった教育から、自ら学び自ら考える力を育成する教育へと転換を図り、ゆとりの中で「生きる力」を育むようにという方向が示されている。「生きる力」とは、自分で考え自分で創造し行動したり自分の言葉で表現する事の出来る力であり、学ぶ意欲、知的好奇心、探求心を身につけて学力の質を向上させようと言うものである。

今回視察したネパールの学校の施設は、日本とは比べものにならない小さな教室に100人くらいの子供がすし詰め状態であり、教材らしいものは少ない。電気もなく暗く暑苦しい環境の中での教育である。しかし、教材の少ない中で工夫して道具を作り、熱心に教える先生たちの姿、悪い環境の中でも一所懸命学ぼうとしている子供たちの姿を見るにつけ、「生きる力」をネパールに感じた。

今回調査団の一員として、一部ではあるがネパールの現状を視察できたこと、今まで実施されてきた青年招へい事業の成果を視察できたことに感謝している。今後JICAがこの事業で望んでいる姿が一年でも早く達成できることを望んでいる。

ハ、野溝一雄

平成9年より3年間、駒ヶ根青年会議所の青年招へい事業を地元行政として側面から支援してきたという立場で参加させていただいた。

航空会社の手違いによるオーバーブッキングでネパール入りが遅れたため、カトマンドゥに宿泊せずにボカラに移動するというあわただしいスタートとなった。遠くに見える雄大なヒマラヤの山々と、公害なのか霞んで見えるカトマンドゥの町。TVでもあまり紹介されない街並みへの興味にまして驚いたのは、ボカラへ向かう飛行機からの地上の景色であった。美しいヒマラヤの山脈とは別に、飛行機の下に広がる山々には頂上から尾根を中心に家屋が点在し、小さな段々畑(千枚田?万枚田)が作られていた。里の町に続く道路はなど考えられないようなところに生活している様子が垣間見られた。いったい彼らは水を汲みにどこまで降りていくのだろうか、そんなこと

を思いながらのフライトであった。

駒ヶ根市と交流があるボカラ市は今回のプログラムの中で最も興味深い都市であった。山の美しさは予想以上であったが、街並みは、16万人が住む都市というイメージではなかった。ここで訪問したセカンダリースクールは、2500人が通う学校で、日本では言えば過大規模校である。日本より狭い教室に、60人程度、長いすに長机、それに黒板があるだけ、この環境で日本で学んだ授業を参考にするのは大変かもしれない。ボールペンに紐をつけて振り子について教えていたようだが、そういった小さな工夫から授業が変わっていくのだと思いたい。

観光都市ボカラ市では、何一つ観光地を見ることなくカトマンドゥを経由してインドとの国境の町ネパールガンジを訪問した。ボカラにも高層ビルがあったわけではないが、ネパールガンジの街の様子は、我々を圧倒した。とても清潔とは言えないが、なにやら賑やかな町。人を運ぶ馬、荷物を運ぶロバや水牛が行き交う町の中の学校でも薄暗い教室の中で、日本と同じような(?)因数分解の授業が行われていた。机に引出しがあるわけでもなく、かばんにそれほど荷物が入っているようにも思えない身軽な様子の子供たちであったが、1日の生活を朝から夜まで取材すると何か違った感想とかアイデアが浮かぶのかもしれないと帰国した今になって思う。

ネパールガンジの郊外の小学校は、広々とした草原の中の学校という印象で、ネパールで見た5つの学校の中で一番気持ちのよいところであった。校庭に木を植える、理科室を作る、クラブを作るなど日本で見えてきてこの地でできることに対して積極的に取り組んでいる様子に青年招へい事業の意義を感じた学校であった。ただ、他のネパールの学校もそうであったがとにかく教室が暗くて狭くて暑くて子供がすし詰めになっている状況であった。

ハード面での協力は私たちの範疇ではないが、ネパールでも維持できる程度の学校施設の改良も必要ではないかと感じた。

ボカラで3人、ネパールガンジで2人、カトマンドゥで5人の青年招へい事業で日本に来られた先生と面談したが、口をそろえて素晴らしいプログラムであったと言っただけだった。もう少しじっくり日本の授業を勉強したいとか、教授法を十分教わっていないという意見も出たが、基本的に先生方にとっては日本はパラダイスであるようであった。しかし、日本の教育現場はそう単純でないことは、十分伝わっているであろうか。ネパール人にとっては遠い将来のことかもしれないが、伝えておく必要があると思う。

カトマンドゥで見学した2つの私立の学校は、特色ある教育をしているようで研修の成果を発揮するにはよい環境だと思った。ただ、どちらも福祉的要素をもっており経営的には苦しいことを強調されていた。公立の学校では、日本での経験を生かして

システムを変えたり、他校に伝えることがなかなかできないということを知り、ネパールで研修成果を活かすための体制づくりが必要だと感じた。

今回の調査では、首都カトマンドウ、観光都市ポカラ、交易の町ネパールガンジと大きな都市の学校を見せていただいた。どの学校もたくさんの生徒を少ない先生で苦勞して教えている様子を見ることができた。飛行機の窓から見た山の上の村々の学校をまだ見ていないのが心残りであったが、何処に行っても子供はかわいいし、未来に大きな可能性を秘めていると思う。この国の未来のために、可能性のある子供たちのためにその指導者である先生の研修は、大変重要な事業であり、有意義な国際協力であると感じた調査であった。

二、樹村茂樹

「うわ～すご～い！」「あの山富士山の2倍以上あるの～！」「なんかこの部屋変なおいがする。」(ネパールのお香が多目的室に充満していたため)ネパールから帰国後訪れた、大阪市立高松小学校4年1組と6年1組の生徒たちが、ネパールで撮ったビデオでヒマラヤの7～8000メートル級の山々を見ている時の感動の言葉である。

今回私の調査の目的は日本武道館に日本武道を見に来られたネパールの皆さんがネパールに帰国後どのように武道とかかわりを持たれているかを調べることである。

国際協力事業団ネパール事務所次長矢部哲雄様、調整員の中村敏郎様、工藤美佳子様、調査団リーダーの官沢重明様、メンバーの野溝一雄様、下平和宏様のご協力のおかげで、首都カトマンドウの3校の小中学校では、なんと嬉しいことに空手道の指導が始められていることが判った。今後ますます発展されることを願っている。また、ポカラの学校から来られた中学校の女性の先生方も日本武道館での柔道やなぎなたの体験武道が大変楽しかったと感想をもらされていた。でもその時民族衣装を着ていたので思いっきり出来なかったとも言われていた。

さて、なぜ私が日本の小学校に調査のビデオをもって報告に行っていたのであろうか？ その答えは調査対象のネパールの帰国青年の方々が小・中学校の先生方だと知り、私の長女6年生と次女4年生のクラスで「日本の小学校の授業風景」(6年生)と「日本の四季について」(4年生)を絵に書いてもらったからであった。6年生の絵はポカラ市の Janapriya Sec School に、また4年生の絵はカトマンズ市の East Pole Secondary School にて生徒のみなさんに直接手渡して来た。生徒の皆さんのみならずネパールの先生方も目をキラキラ輝かせて熱心に絵を見てくれていた。特に海の絵が大変人気があった、やはりお国柄であろうか？ 絵の裏には一人一人描いた人のメッセージと住所が英語で書いてあるので今後個人個人の交流が始まることを楽しみにしている。

ネパールから帰国直前にJICA事務所に報告に行った時に、次長の矢部様、調査団

担当職員の王藤様から『国際交流の意味からも、生徒達同志の個人レベルでの交流に今後発展していくことは大変有意義で喜ばしいことです。』と言って頂いたことが一番心に残っている。私も子供から大人まで色々な形で交流が益々深まることを願っている。

日本武道の柔道、空手道そして韓国のテコンドーが現地警察官の教育、訓練の正式課目に入っているため、JICA次長の矢部様と一緒にナショナル・ポリス・アカデミーを表敬訪問した。警察学校校長の話によると、柔道とテコンドーは日本と韓国からそれぞれ指導者が今来てくれているが、是非空手道の方も指導者を派遣して欲しいと言うことをJICAに対して申し込まれていた。現地指導者の方々と懇談会食をして交流を深めることが出来た。

(3) 提言

イ. 招へい青年の招へい事業に対する意識について

① 問題点

まず一番の問題は、招へい青年が招へいプログラムに対する改善点や要望を、ほとんど持っていないことである。少し聞いただけでは「全て良かった、何も問題はない。」ですまされてしまう。

② 問題点の原因または理由

この原因は、青年たちが具体的な目的意識をもって、日本に研修を受けに来ていないからである。事前調査での“日本で学びたいことは何か”との問いに対して全員が同じ様な、当たり障りのない事柄しか述べていない事からも明白である。

③ 改善のための具体的方策

この問題を解決するためには、来日前にもう少し日本の事を学ぶ時間を設けて、青年一人ひとりが、“自分はこれを学んで帰りたい”という意志を明確にすることである。すなわち、来日前に行う事前研修の改善が有効と思われる。

ロ. 合宿セミナーについて

① 問題点

合宿セミナーでは、日本人のものの考え方や、生活習慣、人生観といった一般的な知識の拾得及び交流は十分出来たが、学校での教え方や教育といった具体的な項目に関する深い討論は十分出来ない。

② 問題点の原因または理由

合宿セミナーが比較的早い時期に行われるため、日本の教育事情や授業について十分な予備知識がなく、具体的な質問等が出来ないためである。

③ 改善のための具体的方策

合宿セミナーの時期を後半にすることが望まれる。特に学校訪問より後に行うことが望ましい。そのためには、都内プログラムと地方プログラムを一括で受託出来る団体に委託するか、合宿セミナーを地方プログラムに組み入れるかである。

ハ、帰国後の活動について

① 問題点

日本で学んだ成果を活かそうとしても実現できない。

② 問題点の原因または理由

経済的要因、学校設備、教育事情、様々な原因がある。

③ 改善のための具体的方策

- a. 公立学校より私立学校の方が改善が著しいので、私立学校からの人選を増やす。ただしこの場合カトマンドゥ周辺に限られてしまうおそれがある。
- b. 同じ地区から複数の青年を招へいする。青年たちは帰国後もプログラムに参加した他の青年たちと情報交換をしながら学校の改善に取り組んでいるので、通信網の発達していない途上国では、地理的に近い場所に同じ経験をした人が複数いることが望ましい。また、周辺の他校への影響という意味でも一人よりは複数の方が良い。
- c. 協力隊員(含むOB・OG)等の経験を活かす。研修プログラムを創る側である日本人も、ネパールの教育事情を詳しく知らないので、教育関係の協力隊員の協力を仰ぎ、青年たちがネパールに帰ってから、すぐに役に立ちそうなプログラムを考える。また、教材等でも、青年たちがネパールで自作できそうなものを、協力隊員等からアイデアとして出してもらい、作り方の研修をプログラムに取り入れる。
- d. ネットワークの確立。b項でも述べたが、帰国青年たちは情報交換を行っているようだが、村部の青年たちは孤立してしまっている可能性がある。帰国した青年たちが、自分たちの活動をもっと広範囲で共有できるネットワークが出来れば改善は早いのではないだろうか。そのためにはJICA現地事務所の協力が

必要である。研修後のアフターフォローの一つとして考えてみて欲しい。

二、学校訪問について

①② 問題点及び問題点の原因または理由

特に問題があるわけではないが、青年たちから要望があった。

③ 改善のための具体的方策

学校訪問は、それぞれの学校でかなり差があるようだが、施設見学的なものよりは、「授業等の教え方を学べる機会を増やして欲しい。」「可能であれば自分たちも教壇に立ってみたい。」等の意見が出されたので、学校訪問のプログラムに関して実施団体は、学校側にその旨を十分伝え有意義なものにして欲しい。

ホ、研修期間について

①② 問題点及び問題点の原因または理由

特に問題があるわけではないが、青年たちから研修期間が短いとの指摘があった。

③ 改善のための具体的方策

大変難しい問題である。ほとんどの青年たちが短いと答えているが、どれだけ長くすればよいのか不明である。

具体的には、合宿セミナーは2泊3日ではなく、3泊4日が望ましいように感じたが、受入側に問題が生じる可能性が高い。学校訪問は、できれば3日以上設けることがよいのではないか。また、ホームステイも3泊4日にして欲しいとの要望もある。

